
COLOR CAT S 蒼銀の吸血鬼

蒼猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COLOR CATS 蒼銀の吸血鬼

【Nコード】

N5034R

【作者名】

蒼猫

【あらすじ】

主人公、赤神雪は普通の中3の少年だが、ある日転校生に殺害されてしまう、気がつくと主人公は死んだ後で、目の前には一人の少年と二つの道が・・・「ここは外れた世界だ・・・右の道は魂の消滅、左の道は異世界での新しい命、お前はどちらを選ぶ？」「当然、新しい命でしょ！」

主人公が異世界でチートな能力を駆使して日常を過ごす物語です
生まれて初めて書く小説なのでかなりの駄文ですが、暖かい目で見てくださいと幸いです。 多分主人公最強系 不定期（遅筆）更新で

す。

プロローグ 1（前書き）

はじめましてkyouuといます

生まれて初めて書く小説なのでかなりの駄文ですが、よろしく願
いします

プロローグ 1

夢を見た

その夢の中で俺は一人の少女と対峙していた
少女が何かを言っているが……聞こえない
そして 少女の腕が俺を貫こうとして――

2054年4月4日朝7時05分

ジリリリリリリリリ ピッ

目覚まし時計が轟音を撒き散らし始めてるが反射的にボタンを押し止める

今日を覚ました少年の名は、あかがみゆき赤神雪と言い、今日から中学校生活の三年目を過ごす少年だ

いつもなら二度寝していたところだが今日は特別な日なのでそういうわけにもいかなかった

前日に制服も用意してあったのでそれをゆつくりと着替えて登校の用意をすると下の階から母親が

「雪ちゃん朝ごはんできたわよ」

と呼んできたので下の階に降り、リビングの扉を開けると身長135位の母が定位置で食事を前にしていた

「中3にもなって雪ちゃんはやめてくれよ……」

と小さな母に講義するのだが

「あらあら雪ちゃん反抗期？ 昔はあんなにお母さんお母さんって可愛かったのに……」

「いつの話だよ……」

「文句言つならご飯あげないわよ」

と他の男が見たら求婚してきそうな（したらそいつはロリコン決定だが）笑顔で返してくるので、いつもどうりに

「はい……すみませんでした」

と言ってから母の対面に座り朝食を食べる、相変わらずご飯、味噌汁、焼き魚、漬物と和食で、洋食が好きな俺が食べても文句なしに美味かった。

「行つて来ます」

と朝食を食べ終えた俺は鞆を背負つて家を出た

「……ふあああ、ねむ」

欠伸をしつつ通学路を歩いていると

「よう 雪ちゃん」

と我が第一の悪友兼俺の幼馴染である月草孝明^{つきくさたかあき}が俺の逆鱗に触れな

がらモーニングスマイルを顔に貼り付けて挨拶をしてきた……いい度胸だ後悔させてやろう

「おい コウ」

「ん？ なんだ？ って痛っ！！」

俺はコウの脛にこの9年間の間に無駄に洗練されたローキックを放つ 因みにコウというのは孝明は孔明とも読むのでそれを短くしたもので、小3の時から使われている愛称だ

「どうしたコウそんなところにしゃがみこんで、俺は遅刻したくないから先に行くぞ」

と道端にごみの様に蹲っている声をかけてからその場を離れた、予断だがコウはこの後遅刻して先生に絞られたらしい

始業式も終わり新しいクラスの書かれた紙を受け取り確認するとC組だった

「またこいつらと一緒にか・・・」

クラスの名簿を見ていくと知っている名前が半分くらいを占めていた

「おはよう雪、また同じクラスか、そいえばコウが居ないけどなんか知ってる？」

と我が第二の悪友にして幼馴染の齊藤麗華さいとうれいかが挨拶をしてきた

因みに麗華の両親は金持ちである

「コウ？ さあ、どうせ寝坊だろう、それよりさすがに小1からずっと同じクラスって何か仕組みれてる感があるんだが・・・お前何もやってねえだろうな」（ジー）

「ま、まさか～なんもやってないよ？」（サッ）

「……なぜ目をそらす」

更に追及しようと言つところで

「ゆゝきゝ さつきはよくもやってくれたなゝ」

とTKY（とても 空気 読めない）な馬鹿こと孔明が殺気を放ちながらこつちに歩いてきた

「げえ！ 孔明！！」

「何がげえ！ だ、後それを言うなら関羽だろう」

「あれ？雪さつきはコウのことは知らないって……」

……ダッ ガシィィ！ しまった肩をつかまれた

「どこに行くのかな雪」

「ちょ、ちよっとトイレに」

「そこにあるのにわざわざ下の階に降りてか？」

「いや、それは……」

「雪、あきらめろどう見てもチェックメイトだ」

クソッこつなつたら麗華に助けを

「あ、私は今回コウにつくから悪しからず」

四面楚歌!?

「さあて雪ちゃん、覚悟はできたか？」

「3分間待つてやるとかは？」

「お前に1分でも与えたら何をするかわからんからな」

くつ、何か方法は無いのか と辺りを見渡してみる……こら、そこ
の麗華、合掌しない

「じゃあ、くたばれええええ!!」

孔明が拳を振り上げ俺が覚悟を決めたそのとき

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った

これはチャンスでは？

「あばよ、孔明」

そう言うが否や俺は教室へ全力疾走した――

ガララララ

「喜べお前ら、転校生だ」

「「「「よっしゃーーーーー!!!!!!」」」」

推定年齢24歳の我等がクラスの担任教師、かみさかきょうや上坂恭也が教室に入りながら小さな声でつぶやくように言つと、と教室中から歓喜の声が・

「先生！ 男子ですか！？女子ですか！？」

やたらとテンションが高い学級委員の藤田君が上坂に聞くとクラス中が白け、視線が先生に集中する、因みに藤田君はバイとの噂が・
・うん、考えるのはやめよう

「喜べ屑共」

おいしい！ 教師がその発言いいのか！？

「転校生は……女子だ」

「「「キターーーーー!!!!!!」」」」

おいこらやめろお前ら、女子が引いてるぞ、

(って コウ！お前もか！？)

とコウの方を見ると周りと同じ用に狂った歓声を上げる悪友の姿が
パチン！

上坂が小さな音で指を鳴らすと一斉に白けた・・・お前らどんな耳
してんだよ

「よし、じゃあ おい、入ってきていいぞ！」

上坂は静かになったことを確認すると、教室の外に居る人物に声を
かけた

プロローグ 1（後書き）

雪「おい作者・・・」

作者「何かな？雪ちゃん」

ガンッ！

作者「イタッ！いきなり脛蹴るなよ」で、何かな？雪君」

雪「何かな？じゃねえよ！何だよこの空間は、そして本編！！」

作者「この空間は所謂アフタートークの場だよいつもやるとは限らないけど、で本編がどうかしたのかい？」

雪「何であんな中途半端なところで終わってんだよ！！」

作者「何でって勢いで書いてたし、自分でも何でかわからん」

雪「月草流 如月！！」

作者「ちよっ！？まだ書いてないことすんな！ ってぎゃああああああああ！！」

雪「えー、ここまで読んでくれた方まことにありがとうございます、作者は小説を初めて書いたので至らないところ等ありますが、よろしくおねがいします。

又、アドバイスや誤字脱字等ありましたらどうかよろしく願います」

作者「では、また次回」

ブローグ 2 (前書き)

ブローグ長いかなー

プロローグ 2

ガララララ

まず目に入っただのは金色の長い髪、白い肌そして青色の瞳だった
簡単にいうと金髪美少女

彼女は教壇に上がると黒板に英語だろうか、日本語ではない文字
で名前だと思われる単語を書いていった

「えーっと、皆さんはじめましてエレアノーラ・アルクインといい
ます、少し長い名前なのでエレナと呼んでください、これから一年
間よろしくお願いします」

「それじゃあお前ら仲良くしろよ、質問タイムはまた後でだ、席
は……」

そういつて教室を見渡す上坂とぼーっとしていた俺の視線が交わ
ると上坂は口元を少し歪めて

「赤神の隣が空いてるな、というわけで赤神しばらくはお前がアル
クインをサポートしろ」

「な！？ ふざけんな上坂！ 拒否権を「却下だ」発動するって何
でだよ！？」

「お前は常任理事員ではないので拒否権は与えられていない、あと
俺のことは上坂先生と呼べ」

「常任理事員って何だよ！？ 誰がいつ決めた！」

「常任理事員とは、誰かの提案に対して自分に不利な内容だと判断された場合拒否権を持つものの事を指す、クラス憲章第32項目に書いてあるだろう、あと現常任理事員は俺と月草、それと斉藤に藤田と天野の5人だ」

「何でコウと麗華の名前があつて俺は無いんだよ」

「何でって、俺は担任、月草はクラス中で一番の戦力、斉藤は一番優秀、藤田は学級委員、天野は敵に回すと……」

「もういい！それ以上言うな」

天野は学園一の情報屋で天野が知らないことは誰も知らないということで有名な話だ、俺も何回天野に脅迫されたことが……

「それでは、赤神の了承も得られたし、アルクインは何かあったら赤神を頼ること」

「わかりました、それでは赤神君よろしく願いしますね」

今の俺と上坂の議論？ に若干驚いていたようだか俺の隣の席まで移動してきて握手を求めてきた

「こちらこそよろしくエレナ」

俺は伸ばされたエレナの手を握り返そうとして指が触れた瞬間

「……ッ！！」

……エレナの手が引かれた

「……えーっと、どうかした？」

「あついえ、すみません いきなり呼び捨てにされたので驚いてしまっ
て」

そう言っ
てエレナは俺の手をとって握手してきた

「さてと、さあ喜べ屑共！！ 質問タイムだ」

上坂はまた教師が言っ
ちゃまずいようなことを言いながら転校生が最も嫌うことのひとつである
う質問攻めの場を作り上げた

その瞬間――

「好きな食べ物は何ですか！！」

「付き合っている人は居ますか！！」

「何人家族ですか！！」

「得意な教科は何ですか！！」

「好きです！！僕と付き合ってください！！」

「スリーサイズはいくつですか！！」

「エレナたん ハアハア」

俺の周囲に一瞬で壁ができた、
って後半のやつ誰だクラスの風紀のため血祭りにあげる必要があるな！！

「はあ ひどい目に会いました」

「うちのクラスの奴等悪い奴等ではないんだが、少々悪乗りする癖

「があつてな」

「ええ、いい人たちだということはなんとなくわかります」

「キーンコンカーンコン」

「もう5時か、じゃあ俺は部活があるから」

「部活ですか？ 何部に所属しているんですか？」

「俺は作業部だな」

「作業部ですか……あまり聞かない部活ですね、ご一緒してもいいですか？」

「まあ構わないけど、この学校では割と有名だが他の学校には無いかもしれないな」

「どんなことをする部活なんですか？」

「そうだな……簡単に言えば何でも屋かな？ 主に教師辺りが仕事もって来るんだよ、仕事を達成できたら何かしらの報酬が教師から貰えるんだよ」

「報酬を貰うのですか？」

「ああ、ボランティアじゃないからな、そういうのは生徒会辺りの役目だ」

「よく、学校が活動を認めましたね」

「その辺りは俺もよくは知らないんだよ……ずいぶん前からある部活で、俺の代で20代目位かな？　っと着いたぜここが作業部の部屋、第2応接室だ」

ガラガラ

「広いんですね」

「ああ、第2応接室と言っているが実は第1応接室を取り込んでいるからかなり広いぜ、確か50平方mだったかな」

「よう雪、遅かったな」

「何で卒業した先輩がまだ居るんですか……」

「まあまあいいじゃねえか細けえことはよ、そんなことより20代目color catsはこのチームが引き継いだんだ？」

「俺らのところが引き継ぎましたけど」

「ふーん、雪月花が引き継いだのか……まああの中じゃ妥当か」

「あのー、引き継ぐとか、チームとか何なんのことをいつてるんですか？」

「……だれ？」

「転校生の「あの噂の美少女転校生か！！」……情報早いっすね」

「お前、作業部に入部するのか？」

「いえ、まだ決めてないんですけど」

「まあいいか、雪説明してやれ」

「何で俺が……」

作業部とはまずcolor catsという大きな団体があり全ての部員はまずそこに入ることになる、そしてその中で相性がいいもの同士でチームを組むことになっていて、基本は組んだチームで仕事を引き受けることになる　ということをエレナに説明し終わると

「じゃあ、俺はもう帰るわ、あんまり卒業生が長居しちゃまずいかな」

「俺も今日はもう帰るか、エレナはどうする？」

「私も一緒に帰ります」

「……明日は命の危険にさらされそうだな」

「それじゃあ俺はこっちだから」

学校から2キロくらい歩いたところにある十字路でエレナと道が分かれたので俺はエレナとは別の道を進もうとするが

「雪さん」

「何？」

俺は呼び止められた意味もわからないまま振り向くと

「インフェルノ」

エレナがそうつぶやくように、しかしはつきりと言うと空気が変わった気がした

「さようなら・・・」

「え？」

「ごめんなさい、私は吸血鬼なんです」

20mはあった距離を一瞬で詰めたエレナは……

グシャ

俺の心臓を貫いた

倒れていく俺が最後に見たのは、紅く輝く瞳で俺を見つめるエレナの姿だった

ブログ 2（後書き）

日曜日から標高1000mの山奥に缶詰されるので春休みに入るまで更新できません もしも次話をまってくれてる方がいらっしやいましたら

まことに申し訳ございませんが今しばらくお待ちください

感想、アドバイス、誤字脱字報告、評価等お待ちしております

神は大抵ジジイって相場が決まってるだよ！！！！（前書き）

合宿から熱出して戻ってきました

まだ熱治ってないのに無謀にも執筆してしまいました

やたら長いくせにかなりgdgdです

そして作者は文才0ということをお忘れなきようお願いします

神は大抵ジジイって相場が決まってるんだよ！！！！

「……おい、起きろ」

声が聞こえた、俺はその声にしたがって身体を起こそうとしたが動かなかった

「……起きろって、言ってるだろ！！」

ゴスッ

俺の腹を辺り、正確には鳩尾に、小さな足がめり込んだ

「いつてえええ！」

「あ、起きたか」

「起きたか、じゃねえよ！！あとここはどこでお前は誰だ！！」

俺は痛む腹を押さえながらいきなり人様を蹴り飛ばしたやつを見る
そいつは見た目十代にも達してないような金髪のカキの姿をして
いた

「む、抗議と同時に質問とは……お前やられなれてるな？」

「ほつとけよ！！そして質問に答えろよ」

「ここはどこで俺は誰かだったか？」

「そうだ、あと俺は何でここに居るのかもだ」

「俺は神様だ」

そういつてその金髪のカキは胸をそらして自慢げに言った
このカキ何言つてんだ？それが俺の第一感想である

「へーそれはすごいな」

「お前絶対信じてないだろ」

「そりゃ当然だろ」

「まあいいや、次に、ここは、外れた世界だ」

「なにそれ」

「まずお前死んだら？」

「……マジ？」

そついうとカキ（神）が俺の胸を指さして俺もそれを見ると風穴
が開いていた

「いや、俺に聞くなよ、まあ多分お前死んだんだよ」

「まあ胸に風穴開いて生きてるわけないしな、その外れた世界つて
何？」

「お前よく話題変えるな、外れた世界つてのは……その前に、お前
の世界で六道輪廻つて知ってるか？」

「魂は六界を回るってやつか？」

「そうそれ、お前それから外れた外道っていうまあ牢獄みたいなところに居るんだわ」

「何で？」

「さあ？ 何か思い当たる点は？」

「吸血鬼に殺された？」

「普通に殺されたんだろ？ 外道に落ちる一番簡単な方法は自分が生まれた以外の世界で死ぬことなんだが」

「そんなことした覚えないし」

「吸血鬼に殺されたといったがその吸血鬼何か言ってなかったか？」

俺は殺された瞬間を思い出してみる

あの驚異的な身体能力は吸血鬼だからまあありだろ

インフェルノ…あれはなんだったんだろうか、ちようどいい、この自称神様に聞いてみるか

「なあ、インフェルノって何だ？」

神（自称）は驚いた顔をして

「何でお前みたいなゴミが地獄の結界魔法を知ってたんだ？……ああ、そういうことか、多分お前が聞いたインフェルノって魔法はその場

に地獄を作る魔法だ」

「魔法かよ！？　でその地獄は俺の世界とは違う世界ってことか？」

「ゴミには無い知恵をよく絞ったとほめてやろう」

やべえ、このガキむかつく

「あつ俺読心術使えるから、後でただで済むと思うなよ？」

マジで！？　やべえ俺今まで何考えたっけ

「で、お前これからどうしたい？」

「生き返り」「無理」……だよなあ」

希望を言う前につぶされてしまった

「じゃあ二つ選択肢をやろう」

そついうと神の後ろに二つ道ができた、いやな予感しかない

「一つ、どつか別の世界へ転生する、二つ、このまま魂ごと消えろ」

えゝなにこのデッド・オア・アライブ

「じゃあ転生で」

そついうと神はかかったなといわんばかりの笑顔で

「そうかそうか転生か？じゃあ次は何に生まれてくるのかな？、力タツムリか？スライムか？」

この野郎不安になるじゃねえか

「じゃあ冗談はここまでにして、着いて来い」

そういうと神は真剣な顔になり左の道へ歩いていった
俺もその後を追うが追いつけない

「お前早すぎだろう」

そういうと鼻で笑われたので全力で走った、もちろんこのむかく神を殴るためである

「もらった！！」

神の後頭部に拳が届くといったところで

「甘いぜ」

いつの間にか神は俺の後ろに居て膝の間接を蹴ってきた
結果、俺はorzをする羽目になった、神が大爆笑している、くそ殴りてえ、っは！ そうかこれはエンドレスループというやつか、ふう危ないところだったぜ

「さてと、転生するんならどんな世界がいい？」

「そつだな、思いつきりファンタジーなところがいいな」

「なるほど、そこでお前はスライムになって勇者のレベル上げに…」

「しなくていいから」

「冗談だ」

嘘付け、目が本気だったぞ

「能力に希望は？」

「チートの」

「まあ、お前に選ぶ権利は無いがな」

「無いの！？ こういう場合って普通俺が決めるんじゃないの！？」

「ふざけるゴミが、平等にくじ引きに決まってるだろうが」

「ただ運任せなんだよ、そしてやばい俺は運が恐ろしく低い、
なんとしてもくじだけは回避せねば」

「ちょっとまって！」

「もう引いちゃった」

終わった……もうだめだ

「そう心配すんなってはずれは無いようにしたから」

「ありがとうございます神様！！！」

「……今までで一番誠意を感じる、なんか複雑な気分だ」

神様が何か言ってるが気にしないでおこつ

「で、何が出た？」

「7番、ローベルジン神の製作物第三番、魔眼だな」

「なんの魔眼だよ」

「暇つぶしに作ったもんだからな、解析、工程模倣、魔力視覚化、簡単に言つと車。眼やアルファス。イグマみたいなのを色々混ぜてみた的なものと空白」

「空白って何だよ」

「何でも入れられるって事だよ」

「身体能力強化とかはデフォルトで付いてるから、後は料理とかもできたほうがいいだろ適当に才能詰め込んでつと、はははは何か楽しくなってきたぜ」

どこから取り出したのかキーボードらしきものをカタカタやつて
る……激しく不安だ

「完成だ」

正直冷や汗が止まらない

「十五歳の姿見るか？」

事前確認は大事だよな

「当然」

現れた姿は今の俺の身長より少し小さいくらいで、髪は少し青色が入ってるようにも見える銀髪の

「女じゃねえか！！！」

神の方を見るが

「……」

呆然としてやがる

「おい、お願いしますから男にしてください」

土下座した、人生初の（もう死んでるが）土下座をした
神は困ったような顔をして

「すまん、俺の管轄外だ」

すまなさそうに言ってきた、くそっそんな顔されたら文句いえねえ

「あきらめて行って来い」

「くそ、恨むぜ」

「しるか、最後にサービスしてやるから恨むんじゃない」

「サービス？」

「お前の生前の記憶をお前が女だったという仮定条件に当てはめて改ざんする」

「やめろ！ 外道が」

「言ってなかったが俺は外道神だぜ」

「そんな神があつてたまるか」

「いや元は何かの神だったんだが、悪戯が過ぎてな」

「だから閉じ込められたのか」

「うるせえよ、さつさで行け」

「はあ、じゃあな」

俺は道を進んでいくと光に包まれて意識を失った

神は大抵ジジイって相場が決まってるんだよ！！！！（後書き）

作者「・・・やっちゃった」

雪「おい、作者、俺マジで次から女になるの？」

作者「今のところその予定、名前考えるのめんどくさい」

雪「拒否権は？」

作者「お前は常任理事員では（ry」

雪「その設定まだあったのか」

作者「そんなことより今回はかつて無いほどの駄文だ・・・どうしよう」

雪「見捨てられるな、確実に」

作者「はつきり言うね、そんな君には女の来世をプレゼントだ」

雪「もう何も言うまい」

作者「暇を見て直していくか・・・では次回」

長々と失礼しました

誤字脱字アドバイス感想評価待ってます

特にアドバイス

チートはチートから生まれるらしい（前書き）

すいません遅くなりました

人名や地名考えるのに時間がかかってしまっ

あと登場人物の容姿の表現の仕方がわからなかったんで、しばらくは脳内で補完してください

今回は少し短めです

チートはチートから生まれるらしい

異世界グレスティアそれが雪が転生した世界の名称だ

彼（今では彼女？）は第四大陸にあるアルビオン^{ファイアー}という都市の領主の娘として生を受けた

1532年 雪がリース・オフィリアという名になってから5年が過ぎた、リースは幸か不幸か容姿に恵まれ、青色が入っているようにも見える腰まで届く銀髪と大きな紫の瞳の瞳が特徴的な可愛い娘へと成長した。

「おはようございます」

「「おはようリース」」

朝私はある決意と共に居間へ降り（因みにリースの寝室は3階）白髪の20代前半のように見える父（吸血鬼）フィンレイと、青色の髪をした20代前半くらいに見える母（魔氷狼）エリスに挨拶した（あくまでくらい見えるである）

（二人同時とは相変わらず仲良いな）

「父様お願いがあります」

「うん なんだい？」

「屋敷の外に「駄目」出たいの……まだ言い終わってないのに」

父の顔を見るといつも笑顔なのに今はその笑顔は消えていた

「何故で「その話は朝食が終わってからね」……はい」

また途中で遮られたが今は何を言っても無駄だと判断し食堂へ移動する

「何故屋敷から出てはいけないのですか」

食事が終わってすぐに私は話を切り出した因みにこの大陸の食事は基本洋食である

「理由？ 理由か、……危険だから？」

「何故そこで疑問系なのですか、それとさすがに5歳になるのにまだ家から一步も出たこと無いってのはどうなのですか」

「とにかく6歳、来年までは屋敷から出ることは許さない」

父様視線に殺気を込めないでくださいマジで怖いから

「わかりました、今日のところは引き下がります」

そういうと父が安堵するのが伝わってきたので私はさりげなく開いてる窓際へ移動する

（高さは2mくらいか、まあいけるだろ身体強化されてるし7割吸血鬼だし）

残りの3割は魔氷狼の血である

「では、勝手に行かせて貰います」

そう言うが否や私は窓から飛び降り、屋敷の門まで全力疾走したが5m位進んだところで滅茶苦茶怖いマイファザーが前方に現れた、私が飛び降りてからこの間1・3秒化け物かこの男

「まさか飛び降りるとは……仕方が無いどうしても行くと言うのであれば私にダメージを与えられたら許可してやる」

（えゝ何言ってるのこの人、しかも構えだしたし大人気ない）

そう思いつつリリースも前世で習得した古流武術、月草流の構えをとる

前世で最も得意だった型

月草流無手三の型 崩月

崩月の構え、前傾姿勢になり両腕を交差させる、明らかに突進の体制である

（この構えは相手の内臓にダメージを与えることに特化した技正直これが通用しなかったら諦めるしかない）

「ではいくぞ」

私が慣れた様子で構えをとったことに訝しんだようだが何も聞くこと無く開始の合図をした

（先手必勝！ ここで決めなきゃ勝ち目は無い）

そう判断したリースは一瞬で魔力を足に込めて瞬発力を倍増させて突貫した

フィンレイはいきなり娘が習ってもいない魔力操作をしたことに驚いて初動が遅れてしまった

一歩でフィンレイに詰め寄ったリースは両手を初動と同時に思いっきり後ろに伸ばした両腕を角度を調節して叩き付けると同時に浸透剣を流す

(……やったか？　しまった、この台詞は死亡フラグ……！)

そんなことを考えながら3秒後、

「……ぐふ」

フィンレイは吐血し、倒れた

「あ、これは明らかにダメージね、っていうか吸血鬼が血を吐くつてのもどうかと思うわね」

リースよ父が吐血という大ダメージにもかかわらずその台詞はひどいぞ

リースは父の屍(まだ死んでないよ)の横を通って門へ歩こうとした

「やれやれ、父が血を吐いたってのにそれは無いだろう」

「……ッ 幻影？」

いつの間にかリースの横に立っていたフィンレイはリースも頭を撫でていた

「まあな、俺が戦ったら勝機が無くなっちまうからな」

（エレニウスチートの目でも見抜けないとか、父様もチートだな……）

「じゃあ、日没には帰ってこいよ」

「え？ 町に出てもいいんですか？」

「そのかわり町の住民以外とは話さないことと町の門には近付かないと約束しろよ？」

「はい、わかりました では行つて来ます」

娘が門を通つたのを見ていたフィンレイは

「アニスいるな？」

「はい」

フィンレイが呼ぶとアニスと呼ばれた若いメイドがどこからともなく現れた

「今回は影から見ていただけでいい、緊急時は独断で動け」

「わかりました」

そういつとメイドは元からそこにいなかったかのように姿を消した

チートはチートから生まれるらしい（後書き）

リース「いきなり5年後って」

作者「大丈夫だ読者の皆様ならこれくらいは軽く付いてこられると信じている」

リース「うわっ　なんて勝手な」

作者「さて、今回はちょっと短めだったから次を急いで書きたいといいたいところなんだが」

リース「いきなり話し変えないでよ」

作者「自分は学生の身分なので当然春休みに入った今宿題が出されたわけで」

リース「それで？」

作者「一応特進なのでその量は多いわけで」

リース「それはご愁傷様」

作者「つまり親がうるさくて宿題が終わるまでPCのコードを取られる可能性大なわけなんですよ」

リース「えっ、じゃあ私の初めての外出は？」

作者「しばらく後になるかもしれない」

作者「そんなわけで手元にPSPがあるので500文字ずつ位の短い更新はできるんですが、読んでくださっている方がいるならこの場で聞きます」

作者「しばらく頭の仲で構成考えとけてひとはスルーで、短くてもかまわないという方は感想なり、メッセで送ってくださいると助かります」

作者「ではまた次回 因みに今リリースはショックで固まってます」

長々と失礼しました

誤字脱字アドバイス感想評価お待ちしております

強制連行！？ 嫌だ！ 私は勉強したくない！！（前書き）

頑張った、私は頑張りましたよ！！
今回も少し短めですが許してください

強制連行！？ 嫌だ！ 私は勉強したくない！！

門を抜けたリースはとりあえず一番活気がありそうな大通りを歩いていた

町並みは道の左右にレンガの建物が並んで立っていてヨーロッパにいるようだった

「おはよう、お嬢ちゃん」

「おはようございます」

果物屋のおばさんに挨拶をされたのでリースも笑顔で挨拶を返す

「この辺じゃ見ない顔だね、旅行かい？」

「ううん、この町に住んでるよ」

「おっとそりゃ悪かったね、フィール食べるかい？」

そういっておばさんは籠に入っている大量のフィールの実（地球のリンゴのようなもの）をリースに渡してきた

「ありがとうおばさん」

「でもおかしいねえ、この町の住人はほとんど知ってると思ったんだけど……お嬢ちゃん名前は？」

「リース・オフィリア」

そう言つと少し驚いた顔をして

「ああ、領主様のとこの子か……領主様は知ってるのかい？」

「うん、外に出てもいいって言われた」

「そうかい、じゃあ帰ったらレベツカがよろしくって言うといておくれ」

「わかった、じゃあまたねレベツカおばさん」

リースはそういうと大通りから少し外れた西区の公園でベンチに座つてフィールの実をかじっていた

すると公園に若い赤ん坊を抱いた女性が入ってきてリースの姿を見つけると近付いてきた

「あなたこの街の子？ 見たところ5歳くらいだけど」

「うんそうだよ」

「学校はどうしたの？」

女性はリースがこの町の子供だとわかると少し眉を吊り上げて叱る様な口調で言ってきた

「え？ 学校には通つてな……」

「ちょっと来なさい、サボるのはよくないわ」

そういつと女性はリースの片腕を掴むと教会の方向へ引っ張って行った

リースはというと女性が片腕で抱いている赤ん坊が落ちることを心配して抵抗しできなかった

「アレン神父!!」

そう言って女性は教会の門前にいた神父へ呼びかける

「おや、アメリカさんどうしました？」

アレンと呼ばれた神父は若かった、十代に見えるほどに

「この子が公園で学校をサボってたんです」

「ふむ、しかし今日は全員出席していたはずなんですがねえ、君どこの……アメリカさん」

「はい、アレン神父どうかしました？」

「この子はうちの生徒じゃないですよ」

「え？　だって5歳だっていってますよ」

「でしょうね、ときにアメリカさんそのこの身なりや目を見て何か気づきませんか？」

「身なり？　なんか高そうな服着てますね、あとは目？」

そう言ってアメリカは視線を少し上げてリースの顔、そして目を見る。リースとアメリカの視線がぶつかった

「紫色の目……紫？　ああ！！」

いきなりアメリカが叫び声をあげて今の今まで掴んでいたリースの腕を放した、白い肌に少し赤い痕が浮かんでいる

「あなたひょっとして領主様のところ……」

「ちょっと注意不足ですねアメリカさん、大方昔の自分と同じことをしているから勘違いをしたのでしょうか」

「ちょっとアレン神父！！」

「失言でしたか、それとリース様」

「なんですか？」

そんなやり取りを2人がしている中リースはというとアメリカの赤ん坊と遊んでいた

「どうもアメリカが失礼しました」

「別にきにしてないわ……　ちょっと腕が赤くなっただけだから」

「ありがとうございます、ではリース様ここであつたのも何かの縁です、授業に参加して行つてはどうですか？」

「遠慮しておくわ」

「授業に参加してはどうですか？」

アレンは聞こえなかった振りをし、リースに詰め寄りながらも一度

「え、遠慮して……」

「どうですか？」

「はい、参加させていただきます」

なにか、妙な圧力を感じたリースは、渋々といった様子で小さく参加することを口にする。と謎の圧力は嘘のように消え、アレンの方を見るとかなり輝いた笑顔でこちらを見ていた

「でた、アレン神父の謎の圧力」

おそらくアメリカもこの圧力を受けたことがあるのだろう

そんなつぶやきもどこ吹く風といった様子のアレンは教会の門を開き

「ようこそリース様、教会学校へ」

そういつとアレンはリースを連れて教会へ入って行った

強制連行！？ 嫌だ！ 私は勉強したくない！！（後書き）

リース「あの神父め」

作者「ふははは、俺が宿題やっている間お前も学校で勉強するかい！！」

リース「お願い！！許して」

作者「ぐふつ、涙目上目使い……だと、だが許さん」

リース「鬼！ 鬼畜！ 外道！」

外道神「呼んだか？」

リース「うわつ、いきなり出てこないでよ」

作者「おつ、外道君ではないか、どうだね？ 君もリース弄り同盟に入らないか？ 今入るとこれから後書きへの出場権が付いてくるよ？」

外道「ひまだしな、よし入るとするか！！」

リース「やめろ！ なんだその不吉な同盟は！ あとそんなに外道を入れるな！！」

作者「もう遅い、さあ外道よこの用紙に必要事項を書きたまえ」

ではまた次回、ちなみにリリースは今外道とじゃれます

誤字脱字アドバイス感想評価お待ちしております

少し裏でのお話（前書き）

ほんの少しのはずだったんだが
かなり膨らんでしまった

少し裏でのお話

教会の中は外から見たとおり、結構広かった

「右側の扉が9歳から、左側が8歳までで……どうかしましたか？」

「あ、いえ綺麗なステンドグラスだなんて」

リースは入ってすぐに見えるステンドグラスに目を奪われていた

「それはある吸血鬼と魔氷狼フエンリルの絵が描いてあるんだ」

（まあ、君のお父さんとお母さんなんだけどね）

「ふーん、そいえばアラン神父も吸血鬼ですよ、吸血鬼が聖職者になれるんですか？」

「昔の吸血鬼は十字架とか聖水が駄目らしかったけど吸血鬼は進化種だからね」

「進化種ってなんですか？」

「それは三年生で習うよ……あとリースちゃん」

（いつの間にか“様”から“ちゃん”に変わってる）

「なんですか」

「学校の中ではこの眼鏡をかけてね」

（この眼鏡……魔法が掛けられてる？）

「虹彩の色を変える魔法？」

「よくわかったね、リースちゃんは魔法が使えるのかい？」

「ううん、簡単な簡単な魔力操作での一時的な身体強化だけ」

「フィジカルチャージ身体強化が使えるのかい？」

「あれは魔法じゃないわ、フィジカルチャージ身体強化ほど魔力の変換効率がよくないから、単に強大な魔力で誤魔化してるだけ」

「そうか、まあその歳で魔法が使えるのは天才くらいだよ、じゃあついてきて」

そう言っアレンは左の扉へ歩き出し、リースもそれに従った

その頃教会の前では

「やれやれ、まさかリース様が外に出てきてるとは……いるんですよアニス」

そうアメリカが呟くと木の陰から一人のメイドが姿を現した

「呼びました？　しかしあなたは相変わらずですね……そのうつか

りは」

「うるさいわね、最近はそんなにやってないわよ」

「去年の夏、道に迷った子供を助けようとして自分も迷子になる」

「な、なんでそれを」

「迷子になったあなたを探し出したのが私だからです……去年の冬には」

「ストップストップ、もういい」

これ以上忘れ去った過去を掘り起こされたくないアメリアはあっさりと敗北を認めた

「まったく、何でそんなに私の弱みを握ってるのよ」

「それは私がその全ての後始末をしたからです」

「そういわれてみればそうね、今気づいたわ」

（はあ、アメリアがそう言うのなら本当にそうなのよねえ）

「そんなことよりアニス、なんでリース様が外にいるのよ」

「旦那様の許可が降りたのですよ」

「うっそ、マジで？」

「リース様は何度が脱走を試みてましたからね、全て私達が潰してきましたけど」

「あんたも苦勞してるのね……そういえばリース様って勉強できるの？」

「さあ、去年から文字の勉強をしてるのは知ってるけどそれ以外は知らないわね」

リースがこの世界に来てまず困ったのが言語……特に文字だった、言葉は理解できるが、書かれている文字がさっぱりわからないのでリースは四歳になったときから必死で言語の勉強を始め、一年でほとんど習得したのである

「確かあなたのとこのアッシュ君も今年で五歳だっけ」

「うん、今年からって言うても三日前からだけど学校に行かせてるわ、リース様と喧嘩とかしなければいいけど大丈夫かしら」

「あなたに心配されるとは……ああ、なんて可哀想なリース様」

「どういう意味よ!!」

「あんまり大声出さないで、その赤ちゃんが起きるでしょ」

「元を言えばあんたのせいでしょうが」

ちょうどそこへアレン神父が教会から出てきてアニスの姿を見つけると

「やっぱりましたかアニス」

「アレン神父、この馬鹿女を鎮めてください」

「あんまり人を馬鹿呼ばわりするものではありませんよ」

このときアメリカとアニスは（アレン神父にだけは言われたい）と同時に思った

「アニス、この手紙をフィンレイに渡してください」

アニスは自分の名前を呼ばれた瞬間（心を読まれた！？ こいつ、化け物か）と大変失礼なことを思ったが、“領主様”ではなく“フィンレイ”と呼んだことで少し顔をしかめた

「毎回私をパシリにしないでください」

「生徒は恩師に恩返しをするものですよ」

「はあ、わかりました、この手紙は、断罪者からと言うことでよろしいですね」

そう言つて黒色の手紙を奪うように受け取った

「ええ、で、こちらの手紙は領主様をお願いしますね」

と、今度は先ほどの黒色ではなく白色の手紙だった
それを見たアニスは心のそこから嫌そうな顔をして

「生徒ならここにもう一人いるのでそちらの方をお願いしてはどう

でしょう」

「ふむ、それもそうですね、ではアメリカお願いしますよ?」

「え、アニスお願い代わりに渡して来て」

その言葉を聞いた瞬間笑顔になって

「では貸し—ということだ」

アニスは非情だった

「そういえばリース様はどうしました?」

「ああ、それならアーネスト君に任せて来ましたよ」

「そうですか、まあ彼なら何とかなるでしょう……では私はこれで」

そう言っが否やアニスは次の瞬間には文字どおり消えていた

少し裏でのお話（後書き）

リース「私の出番が少ない」

作者「まあ、そう怒るなって、次に出してやるから」

外道「そう言つて、あっさり裏切るのが作者だな」

リース「ひどい!!」

作者「まあ、そう怒るなって次は出してやるから、外道を」

リース「外道が本編に出るの？」

作者「今のところは声だけの予定だけだな、ついでにちょっとネタばれすると外道の名前が決定する予定」

リース「なんだか予定ばかりね」

作者「まあな、今回も我が愛するリースをもう少し出す予定だったんだが書いてるうちに逸れたしな」

リース「愛するって…… / / /」

外道「おっ、照れてる照れてる」

リース「な!? 照れてない!!」

作者「では、向こうでじゃれる二人はほっという、ではまた次回」

長々と失礼しました

誤字脱字アドバイス感想評価お待ちしております

アーネスト先生は優しいようだ（前書き）

すみませんまだPCコード帰ってきてないので無謀にも携帯でがんばりました。だからミスが多かったり読みづらいかもしれませんが、PCが使えるようになったら直しますので勘弁してください。

後書きのあの会話人気ないのかな？

携帯疲れる

アーネスト先生は優しいようだ

リースは廊下を歩いていた、おそらくリースが入るだろうと思われる教室はすでに通り過ぎ、アレン神父が立ち止まった扉には紙が張り付けられていた

「教員室？」

「リースちゃんはもう文字がよめるのかい？」

「はい、大体読めます、去年から勉強しましたから」

因みに普通文字が完璧に読めるようになるまできちんとした教育を受けて一年半と言われているが、リースは生まれ持った“瞬間記憶能力”という“才能”で一年で文字が読めるようになった

（やはりこの子は少し異常だな、アーネスト君には少し重いか？）

そう思いながら扉を開けて部屋を歩いて椅子に座っている青年のところまでいく

「やあ、アーネスト君」

その声を聞いた瞬間その青年の表情が一瞬固まったことにエレニウスの眼を持つリースは気づいたが……気のせい、と見なかったことにした

「な、何か用ですか？ アレン神父」

「いえいえ、少々頼みたい事ができてね……聞いてもらえますね」

「まずは、話を聞かせてください」

「勿論構いませんよ、ただし条件があります」

「じ、条件ですか？」

「ええ、私の問いに“はい”か“イエス”で答えてください」

この時リースはよく神父に成れたなと思ったのは秘密である

「わかりましたよ、何ですか頼みって」

青年、アーネストはため息をしつつこの外道神父に屈した

「頼みと言うのはですね……」

アレンはアーネストの耳元へ顔を寄せて、所謂内緒話して何やら話をしている

（私に聞かれちゃいけないのかしら）

そう思いつつ約一分

「ええ！？ 無理ですってそんなの」

「では頼みましたよ、大丈夫です（多分）君なら出来ます、なぜなら君も私の自慢の教え子なのですから」

そう言うが否やアレンは素晴らしいスピードで歩いていった
った

「「……」」

残された二人、非常に気まずい空気、呆然とする二人

「あの……」

リースよりもいち早く我に返ったアーネストが勇気を振り絞って
？ リースに話し掛ける

「あ、はいなんですか？」

「君は領主様の所のリース様でよろしいですか？」

「はい、そうですけどあなたが一年生の教師ですか？」

「ええまあ、新人のアーネストと言います」

「リース・オフィリアです、それと敬語はやめてください」「し
かし……」

「やめてください」

もう一度少し強めに言うとうアーネストは折れた

「じゃあ、リースちゃんは授業体験のような形でいいかな？」

「それで構いません、それと、この眼鏡なんですけど……ちょっと

私には合わないみたいなんですけど」

「それはアレン神父の魔法具ですね、困ったな、僕には効果付与は出来ないし」

エンチャント

「エンチャント？」

「ん？ リースちゃんは魔法に興味あるの？」

「はい」

「エンチャントはね、物体に魔法の効果を与える魔法なんですけど、これが意外とAAランク……ランクって知ってる？」

「知りませんけどなんとなくわかります」

「多分間違っていないから説明省くけど、エンチャントをするには対象となる物体の情報を完全に把握する必要があつて、これもまたAAランクの魔法を使うといつかかなり面倒な手順をふまないと出来ないんだよ」

「成る程、そして先生はその魔法が使えないと」

「そのとうり、魔法に興味あるなら前に読んだ魔法の本あげようか？ 丁度魔法入門の本だし」

そう言つてアーネストは机に積まれた本の中から一冊の本を引張り出してリースに差し出した

「手書きの本？」

「それは古い王国の宮廷魔導師が一人の王子の為に書いたといわれる本で、これから魔法を始めるなら最高の本だと思うよ」

「ありがとうございます、いいんですか？」

「僕はもう読んだしね、さあ教室へ行こうか」

アーネストに付いて廊下を歩き紙に“1”と書かれた扉の前まで来た

「じゃあ、僕が呼んだら入って来てね」

と言って扉を開けたら、扉から少し離れた所に少年が立っていた……片手に椅子を持って

「もらったあ！」

少年は手に持った椅子をおもいきりアーネストにぶん投げた
椅子は少年が投げたにも関わらず意外にスピードを出し、突然の不意打ちに驚いているアーネストの顔面に突っ込んだ

「……」

「やったか！？」

いかん少年それは死亡フラグだ！

アーネストに突っ込んだ様に見えた椅子は寸前で彼の右手に止められており、彼の表情は右手と椅子で隠れているが、誰もがその表情を想像出来るだろう

「アツシュ・シュノーケイン、後で教員室まで来るように」

そう言ってアーネストは教室へ入って行った

「さてと、皆さんにお知らせがあります、今日このクラスに授業体験に来る子がいます、困っていたら助けるよう、わかりましたか？」

「はい」

「では、入ってきて下さい」

呼ばれたので私は扉をガラガラと開け、教室へ入る

（うう、緊張してきた）

「では、自己紹介してください」

「えっと、リース・オフィリアです、よろしくおねがいします」

「では、入って来て下さい」

先生がそう言った瞬間俺のさっき叱られて沈んでいた気持ちは消えて、入って来る新しい子への期待で俺の心はいっぱいになった

（どんな子かな？ 女の子なら可愛い子がいいな）

などとその場のほぼ全員と同じ事を考えながら体験生を待っていると

「えっと、リース・オフィリアです、よろしくおねがいします」

入って来たのは期待を遥かに上回る美少女だった

アーネスト先生は優しいようだ（後書き）

誤字脱字アドバイス感想評価待ってます

質問攻め（前書き）

すいません

今回の話はかなりggggです

俺はいつたい何が書きたかったのだろう……後日修正するかもしれ
ません

質問攻め

「それじゃあ、席は……」

そういつてアーネストは教室を見渡す、リースとしてはこれから起こることを予想してできれば扉のそばが良かったのだが

「リアの席を譲ってあげてくれないか？」

「いいですよ」

そういつてリアと呼ばれた少女が席を立ち、窓側にある唯一誰も座っていない席へと移動した。

そして、元リアの席でこれからリースが座る席は、教室のど真ん中、逃げ場はない。

（この教師、わざとやってるわね……）

と、アーネストへ怨念が籠った視線を投げかけるが、なぜか笑顔で返された。

アーネストとしては、早く他の子たちと仲良くなれるようにしたつもりなのだが、リースにはそのありがたい心遣いは届かなかったようだ。

「じゃあ、一時間目は算数だ、休み時間が終わったら、席についておくこと、アッシュは4時間目が終わったら職員室へ来い」

そういつて、アーネストは教室を出て行った。

(3……2……1……今だ！)

リースは急いで席を立ち、扉へ向かおうとしたが

(読まれている！？)

教室の子供はその行動を予測していたのか、30人中8人を扉のガードへ回らせ、4人を窓へ、そして残った全員でリースを囲んでいた

「さあ、質問タイムだ」

リースは、本気を出せばこの程度の包囲を抜けるのはたやすいのだが、こんなことで無駄に体力を使いたくなかったので潔く席に着いた。

次の瞬間――

「好きな食べ物は何ですか」から「付き合ってください」まであらゆる質問が次々と出された

「あ……う」

(どの質問に答えればいいのよ……)

「ちょっとちょっと、困ってるじゃない」

さっき、リースに席を譲った少女、リアが、割って入った

すると、さっきまでの包囲網が少し緩くなった

「なんだよリア、いいじゃん質問くらい」

「質問するのはいいけど、そんなに一気に言われても答えられるわけじゃないじゃない、彼女困ってたわよ」

「わかったよ、じゃあ次の授業を自己紹介と質問の場にしようぜ、アネット先生に頼んで」

「ふむ、それはいい考えね、頼んでみましょうか、じゃあ今は解散！」

リアがそういうと包囲網は完全に解かれ、それぞれ思い思いのこ
とを شدした

「あの、ありがとう」

とりあえず、場を治めてくれたことに礼を言う

「ああ、いって、私の名前はリアよ、よろしく」

「よろしく」

「さて、挨拶もしたことだし——」

いきなり抱きついてきた

「え？ ちょっと」

「あゝかわいい、肌もすべすべだし、ほっぺもぷにぷにだし」

「ちょ、リアやめ——」

「お前も人のこと言えねえじゃねえか」

いつの間にかリアの背後にはアッシュと呼ばれた子がいて、リアの頭にチョップをする……地味に痛そう

「痛っ、ちょっとアッシュなにすんのよ」

やっとリースはリアの抱擁から逃れることができた

「なにすんのよ、じゃねえ、大丈夫だったか？」

アッシュはリアのパンチやキックの相手をしながら聞いてくる

「ええ、ありがとう、えっとアッシュ君？」

「ああ、アッシュ、呼び捨てにしてくれ、そっちのほう慣れてるから」

「わかった、じゃあアッシュよろしく」

「おう、っとそろそろアネット先生が戻ってくるか」

「アネット？」

「アーネストって呼びにくいじゃん」

「なるほど」

一分後――

「よしお前ら、算数の時間だ」

アネット先生が教室に入ってくるや否やそう言った、手には大量の紙を持っている

「アネット先生、生徒一同からお願いがあります」

「アネットって呼ぶのやめてくれないかな……お願いって？」

「この時間を自己紹介や、質問のために私達へください」

「いいよ」

「」「」「いいのかよ!?!?!」

教室にいたほぼ全員が叫んだ、もちろんリースも

「そういうと思って準備してきたよ」

そう言ってプリントを回す……何々、自己紹介カード
名前、誕生日、好きな食べ物、etc

そんなわけで、アネット先生の粹な？ 計らいで無事に一時間目は終了した、次の時間はこの時間で潰れた算数……とうとう前世の自分が残してくれた知識を使う時が来たか

今リースの中には、赤神雪という人格は存在していない、魂が転生する時の不都合かはわからないけど、今の人格は元々は雪が上書きするはずだった人格で、何故か人格は引き継がれず、記憶や、知識、経験のみが引き継がれている、もっとも、記憶や知識を元にして雪の人格を作り出すことは可能であるので、リースは3、4歳の頃は、雪の人格を再現して話し相手にしていたためお兄様と呼んでいた

そんなわけで、リースは算数の授業では誰よりも問題を解くことができ、それが全て正解なので、かなり持ち上げられてしまったが、何事もなく授業は終了した

質問攻め（後書き）

誤字脱字アドバイス感想評価待ってます

3時間目……じゃなくて更に裏（前書き）

なんか最近雑になって来た気がする
これ以後で直すかもしれない

3時間目……じゃなくて更に裏

次の授業は外で行うらしいので、リアとアッシュと共に教会の庭へ出た

庭は教会の裏側に有り、かなり広かった

「よし、全員揃ったな、それじゃ、三、四時間目を始める」

(三……四時間目?)

「外の授業は大抵2時間続けてやるのよ」

(なるほど……でも)

「心を読むなって?」

「だから心を――」

「だって顔に書いてあるんだもん」

「――う」

「こらそこ、無駄話しない」

アネット先生に怒られてしまった

「はい」「」

「それじゃあ、適当にペアになって」

「リース、一緒に組みましょ」

「うん」

リアと組むことになった

「じゃあ、組んだ相手と組み手な、魔力の使用は一切禁止、じゃ始め」

（え？　組み手？　しかも魔力使用禁止？　お嬢様生活してた私に勝ち目ないじゃん！）

「じゃ、行くよリース」

——アルビオン南の草原——

「おいアレン、どこだ？」

アルビオン領主、フィンレイとはある腹黒神父の手紙に呼び出されてここまで来た、手紙に書かれていたタイトルは《狩り》

「遅かったですね、老けました？」

「まだ老けとらんわ！ それで、敵は？」

「ここから5km位でしょうか、数は16人全員人間です、闇ギルド《シルヘリム》ですね」

「吸血鬼狩りシルヘリムか、前回の戦争の遺族ってどこか」

「……なにせよ、狩られる前に狩るだけです、パターンは？」

「敵は、前方に8人、その後ろに5人、この13人はザコだな、パターンはCで行く」

「鬼ですね」

「吸血鬼の《鬼》は鬼だぜ……さて、準備するとするか」

フィンレイは地面に手を当て、魔力を流し始める

「毎回思うんですけどあなたのそれは反則では？」

「うるせえ、次元魔法は操作が面倒なんだ話しかけんな」

しばらくすると、前方1km地点を接点に魔法陣が展開された、この魔法陣は魔力で書かれているので不可視の陣である

「前方1km地点の石を接点とする、観測地点は接点を0°として、中心から90°の接点に設定……準備で来たぜ」

「それでは攻撃の準備に入りましょうか、それと、今回は《成りますか》？」

「いや、いいだろ、俺はローア撃つけどお前は？」

「あれを撃つのですか……ならば私は神父らしくクロスで」

「お前絶対神父の名を汚したぞ……まあいいや、4小節省略」

「悲劇の迷宮に囚われし、闇色の狂王よ、その叫びをもって、我に仇名す敵を撃て 《アルティスト・ローア》展開、待機」

フィンレイの腕に6重に重なった魔法陣が現れ魔力を放つ

「こつちの準備はできたぜそつちは？」

「こつちもできました」

見るとアレンの腕にも魔力が集中している、

「陣を発動させる」

《禁呪・セカンド・ディメンジョン》

この呪いをかけられた者は、観測点から二次元で見られ、その観測された通りに影響される

つまり、昔のゲームの用に本来は横に外れた攻撃も、その軌跡が平面（奥行きがない）で見た時当たっている場合、当たったものとして扱われる

この場合、この魔法の効果を最大限引き出せる攻撃は何か、簡単だ、高さがあつて貫通する攻撃

「全員括つた、撃つぞ」

「アルティスト・ローア展開……行け」

フィンレイの腕が前に突き出され、腕に纏つていた6重の魔法陣が砲身の様に伸びていく、そして、膨大な魔力を球体に集め、猛スピードで撃ち出した

それと同時にアレンも紅色の十字に交差した魔力を纏つた衝撃波
フラッディ・クロス
《血塗られた十字架》を放つ

フィンレイが放つた高威力の魔力砲とアレンが放つた衝撃波は一秒足らずで約2kmの距離を駆け抜け、前方に配置された8人を飲み込もうとしていたが、直前で8人係で張られた魔力障壁に阻まれたがあつさり砕け、8人を飲み込んだ。

そして、次に配置された5人も同様に障壁を張つたがやはり、あつさり砕け飲み込んだ、ここまで計13人分の魔力障壁に阻まれた砲撃は、かなり威力を削られており、中心に立っていた男の大剣の一撃で砲撃は完全に霧散した

「俺は今の太剣をやるからアレンは後の2人頼んだ」

フィンレイは走りながら手に魔力を集め、太剣を召喚して、先の太剣使いに太剣を振り下ろす

太剣は恐ろしいスピードで太剣使いに迫るが、金属同士がぶつかる甲高い音を立てて、剣の腹で防がれた

「今のスピードに大剣でついてくるとはな」

「壁になった者たちの為にもそう簡単に死ぬ訳にもいかないのではな」

「そうか、なら、これはどうだ？」

フィンレイは徐々にスピードを上げながら様々な軌跡を描き続ける
大剣使いも14回までは反応できていたが、上がり続ける速さに
とうとう限界を迎えた

「悪いな、俺の勝ちだ」

フィンレイは大鎌を真横に一閃し、首を跳ねる、大量の返り血を
浴びながら、フィンレイは暫く目を閉じて、名も知らぬ復習者に祈
りを捧げていた

祈りが終わり、アレンを探すと、一人は地面に倒れて居て、もう
一方と何やら話をしているようだった

「それでは、あなた方の雇い主は太ったハゲですか？」

「それを知ってどうする」

「……では次、あなた方の目的は？」

「……」

「おいアレン、何も吐かねえぞ」

「そうですね」

アレンは手から延びた魔力の剣で沈黙した男を切り捨てる

「雇い主はあのハゲで間違いないでしょう」

「もう鍵の場所が割れたのか」

「いえ、多分今回は本当に鍵が在るのか確認に来ただけでしょう、潰しましたが」

フィンレイとアレンは辺りを見渡す

見えるのは、砲撃で千切れ飛んだ肉片と、“2つの”死体だけだった

「……！ 一人足りない！ アレン絶対逃がすな鍵の事を聞かれた」

「わかってます……西に1・2km！」

「捉えた」

フィンレイは持てる力全てで大鎌を投擲したが、僅かに間に合わず、転移を許してしまった

「最悪だな」

「すみません、幻影との区別が付かなかったとは、訛ったようです」

「終わったことはしょうがねえ、……3年だな」

「それくらいですね、どうしますか？」

「そうだなー」

「本当にそれでいいのですか？」

「今の段階での最良はこれだ、まだ3年ある、それ迄に何とかする」

3 時間目……じゃなくて更に裏（後書き）

作者は恐らく暫く更新出来ないと思われる
もし更新したら、それは

- 1、執筆の事で頭が一杯で何も手に付かない
- 2、こんな事ばかりやってられつか、気分転換だ
だろうと思われるので、更新していたら叱って下さい

そして、三年の月日が流れた（前書き）

か、書けた〜

何か後に行く程 g d g d になって行ってる気が……

そして、三年の月日が流れた

「それにしても、復讐よりも報告を優先するとはな」

投擲した鎌がブーメランのように戻ってくるのを受けとめつつフインレイが愚痴る

「自分一人では無理と思ったか、元々あのハゲの手の者だったかでしょう」

「まあ今度会ったら死神の名にかけてきっちり殺すとして……おらあ！」

手に戻って来た大鎌を先程大剣使いの首を撥ねたのと同等の速さで振り下ろす

「うわ！？ いきなり鎌振らないで下さいよ、危ないなあ」

「当然だ、殺す気で振ったからな」

「リースちゃんのことですか？」

「そうだ、『これから学校に通わせるのでよろしく』だと？」

フインレイは身に纏った黒衣のポケットから白い手紙を取り出す

「……そうですよ、あの子にはこれから学校に来てもらいます」

「俺だってできればそうしてやりたいが、まだ駄目だ」

「今日少し様子を見ましたが、あの子には友達が必要です」

「……それはお前の経験からか？」

「そうです、それにあんまり閉じ込めていると、余計出て行きたくなるものですよ、今日だってそうじゃないんですか？」

「……わかった、その代わり、月の日と、水の日、それと闇の日の週三日が条件だ」

この世界でも七日で一週間とされ、月、火、水、木、金、土、光と七の精霊の属性を曜日として、一ヶ月は四週間、二十八日とされている

「いいでしょう、心配しなくても私やアーネスト君もいますし大丈夫ですよ」

「……そうだな」

—— アルビオン第四教会庭 ——

「ふう、負けちゃったか」

「リア強かった、吸血鬼じゃなかったら負けてたよ」

「私の《神速》を一回で見破って、私よりうまく使つていて何を言うか」

「元々似たような技知ってたからそれを応用しただけだよ」

「元々知ってた技ねえ」

そんな二人の会話を近くの木の下で見守っている人が一人、教師アーネストである

（今回の組み手……最初のリアの一撃、反応できなかったように見えたが、実際は見えていた、ならば何故躲さなかった？ 躲せなかったのか？ 身体を見た感じ、鍛えているようには見えなかった、頭の反応速度に体の反応速度がついていかなかった？ 一回見ただけで《神速》はそう簡単に出来るものではない、リース・オフィリア、この子は異常すぎる）

表面上リースはリアと談笑しているように見えるが実際はアーネストの視線に気づいていた

（うわ、アネット先生こっち見てる、流石にちとやり過ぎたかな）

今回の組手でリースは、《エレニウス》の異常な動体視力と一度見た相手の技を盗むという効果を使った。

動体視力ならば偶然と言う逃げ道があるが、調子に乗って技の模倣までしたのでそれも使えなくなった

アーネストに何か聞かれた時の言い訳を考えていると、終業の鐘が鳴った

「よし、今日の授業は終了、アツシュは職員室まで来い」

（今は様子見って感じかな？ 別に隠してる訳じゃ無いけど、出来るだけこの眼は伏せておきたいな）

「リア、次の授業は？」

「今日の授業はもうお終り、後はアツシュを待って帰るだけだよ、そうだ！ リース家に来ない？」

「え？」

いきなりリアに突拍子もない事を言われ、間抜けな返事をしてしまった

「お母さんに新しく出来た友達を紹介したいし、もし良かったら昼ご飯も食べて行きなよ」

「いや、でも迷惑じゃ……」

「いや、迷惑では無いと思うぞ、ウチの親もリアントコの親も騒ぐの好きだし、むしろ連れてか無いと俺らが殺される」

何時の間にか戻ってきたアツシュが話に加わる

「それじゃあ、お邪魔しようかな」

「ただいま」

「お帰り、パーティーの用意出来てるよ」

リアの家に着いたら、アメリカさんが居た。それはまだいい、だが何故パーティーの用意が出来てるの？

「アメリカ叔母さんの特技、お祭り好きは面白そうな事なら絶対見逃さないのよ」

それは特技なのだろうか

「そんな事より今日は何のパーティーなの？」

「しかも、見逃さないけど内容は全く分かってないの」

「あら、お帰りリア、アッシュ、それと？」

奥からリアのお母さんが出て来た、何で分かるかって？ リアと同じ赤色の髪をしているから

「リースです」

「なるほど、アメリカがいきなりパーティーの用意と言ったのはこいうわけか」

その後、私たちは用意された料理を食べ、親達も混じって談笑したり、テーブルゲームの様なもので盛り上がりたりして、あっという間に時が過ぎて行つた。

「あら、もうこんな時間ね、今日はもうお開きにしましょうか」

時計を見ると、五時半くらいを指していた、そろそろ日が沈む頃合いだ。

「そでじゃあ、私はそろそろ帰りますね」

「そうね、じゃあアッシュに送らせるわ」

「いえ、大丈夫です、お邪魔しました」

アッシュには悪いけど、アッシュが私の走る速度に付いて来れるとは思えなかったので、見送りを断ってリアの家を後にした。

家に着いたのはちょうど六時ごろだった、母様は夕ご飯の仕度をしている、母様は貴族なのに料理などの家事をやリたがる、使用人たちは『仕事を取らないで』と言ってるが
居間へ行くと父様から今日の事を色々聞かれた、学校に行ったことや、友達が出来たことを話すと

「リース、学校に通ってみないか？」

「え、いいのですか？」

「いろいろ条件付きだけどね、一週間に月、水、闇の三日だけ、それと五時間目が終わったら帰宅すること、帰宅したら礼儀作法を真面目に学ぶ事、できるかな？」

「うう、わかったそれでいい……はあ、礼儀作法か」

「まあ、頑張りなさい　それと、はい入学祝」

父様は私の頭を撫でていた手を服のポケットに入れてリボンに包まれた小さな箱を取り出した。
妙に準備がいいな

「ありがとう、開けてもいい？」

私は返事も聞かずにリボンを解き箱を開けた。
中に入っていたのは煌びやかな装飾が施された腕輪だった

「じゃあ頑張るんだよ」

それから三年、私は朝、学校に行き、昼過ぎに帰宅し、それから母様に礼儀作法を叩き込まれ、終ったら魔術書で魔術の勉強か月草の特殊な気功術で身体の内側を鍛えるという様な日々を送って私は八歳になった

登場人物紹介 リース（前書き）

登場人物紹介って何書けばいいんだろう

登場人物紹介 リース

名前 リース・オーフィリア

性別 女

種族 上位吸血鬼

年齢 8歳

誕生日 一月十七日

身長 1mくらい

体重 鑑定されたところ、次元系魔術で無かった事にされている

髪 腰まで届く位の長さ、色は少し青色が入った銀

瞳 とある理由により視力はとても良い（両目とも6・0くらい）
色は紫だが、吸血等吸血鬼特有の行為をする際や、本気で戦闘をする際や、感情が高ぶると濃い紅色になる

肌 白色（友人に雪のようだと言われたことがある）

好きな物 綺麗な物、甘い食べ物

嫌いな物 辛い物、苦い物

備考 吸血鬼だから基本的に身体のパテンシャルは高め、更に魔

氷狼の血も少し入っているので魔力と敏捷はかなり高め（魔力等についてはとある神様の有難い？配慮で底知らず）

基本的に前世で会得した古流武術《月草流》を駆使して戦うが、エレニウスで盗んだ技を使う時もある

昔は自分の脳内で前世の人格を創って話し相手にさせていた、ぶっちゃけ頭がアレな人、よく言えば妄想少女

最近は妄想癖（笑）は収まっているようだ

性格 おとなしくて割と優しい？

結構人見知りとかするかもしれない

持ち物

エレニウスの眼：何処ぞの神様から頂いた神の眼（笑）

色々な効果の眼を適当に混ぜたら出来たらしい

前世の記憶：名称の通り前世の自分赤神雪の記憶、この記憶の本来の持ち主は何処へ？

色々な才能 読んで字の如し、生まれることが決まった時に何処ぞの神が適当に与えたもの。だがしかし！俺の創る世界小説の住人にちよつとやそつとの才能ごときで太刀打ちできると思ふなよ！（by 作者）

アヴァロン：リースが五歳の時に貰った腕輪、本人は真名は知らず、何か便利な魔法道具マジックアイテムくらいにしか思っていない 何気に多機能のアーティファクト

九つの最上級魔石が埋め込まれているので、魔法媒体としても使

える

ある特殊な装飾がしており、魔力リミッターとしての役割も果たしている（所持者の意思で自由に開閉可能）

以上でとある人物からの報告を終わります

登場人物紹介 リース（後書き）

はい、とある人ご苦労様でした

これから更に増えるかもしれませんが基本的にこんな感じでキャラ紹介もやって行こうと思います、順番は作者の気まぐれです

使える駒は多いに越したことは無い

辺り一面、地面さえも白く地平線なんてものもあるかわからない、ただ白い世界

そこには、金色の髪をした少年が一人いるだけだった。

《外道》そこがその世界の名であり、その少年こそがこの檻の世界の主である。

その少年は目の開いて前を見ていた、その視線の先には遙か彼方まで行っても何もないが、少年の目には別のものが映っていた。

「……ここしばらくの間探してみたが、やはり見つからないな」

今、少年が見ているのは赤神雪のいた世界《人間界15 - 396 2》

この世界で雪を殺した少女、エレアノーラ・アルクインという名の自称《吸血鬼》を探していたが、見つからなかった。

「探し方を変えてみるか……《エレアノーラ・アルクイン》を知っている人間」

すると、少年が指定した条件に当てはまるものリストがどこからともなく現れる

「だいたい五百人くらいか？ 次《この中からエレアノーラ・アルクインに強い感情を持っている、または、強い繋がりのある人間》」

するとリストからかなりの数の名前が消え、残ったのは三人だけ

「月草孝明、斉藤麗華、それと天野一弥か、全員雪の知り合いか」

このときふとある疑問が浮かび上がった。

「前の二人はなんとなく解るような気がするが、この天野という男はなぜリストに残ってるんだ？」

とうとう何か尻尾をつかんだかと期待しながら天野の意識へ入り、情報を見る、このとき一応エレオノーラに関すること以外は見ないようにしたあたり、この少年は神としてはかなり優しい部類に入る。そして情報を見た後、彼はため息をついた、期待していた分それが裏切られたときの残念感は大いなものとなるものだ。

「……こんな理由でこの長い間一人を追い続けるものなのか？ と
きどき人間がわからなくなるぜ」

彼、天野一弥がエレオノーラを探している理由は、神にはあまり理解のできないものだった

彼は優れた情報収集能力と情報処理能力から、彼を知る人物からは情報屋として知られていた、初めの頃は情報屋などする気はなかったが、ある出来事を境に彼の知名度が急上昇し、彼に金を出してでも調べてくれと頼む人が増え、いつの間にか彼自身も自分の意義を情報収集に見出していた。

そんなわけで彼は常に転校生が現れるなら五日前にはほとんどの情報をそろえることができる、しかし彼はエレオノーラという転校生が存在すること自体、彼女が教室に入ってくるまで知らなかったという天野にはありえないことが起きた。

さらに、彼はエレオノーラの情報に関してはほとんど調べることはできなかった。

そんなわけで彼はエレオノーラに対して強い感情を持っていた

一応残った二人からも情報を見てみるが、予想していたことがそのままだったり、成果は挙げられなかった

この二人の強い思いは疑いである、普通人は誰でも他人を疑うが、この二人はそんな普通とは比べ物にならないくらい強いかった、疑っている《こと》自体はそこまで強いものではなく、ただ一点赤神雪の死についてという条件が絡まって強い《感情》として判断された、つまりそれだけこの二人にとって雪の存在は大きかったということだろう

「……やはり見つからないか、ならもうこの世界にはいないと考えたほうがいいか？　そもそもこいつの目的は何だ？」

そういつて神は雪の殺されたときの記憶を見ながら何か見落としていることはないか調べる。

すると、ひとつ気になることが浮かび上がった。

「待て、なぜこいつはわざわざ魔法を使った？　確かに《インフェルノ》は結界としても使えるが、それだけなら簡易結界でよかったはずだし、そもそも吸血鬼なら周囲に人がいないことはわかっていた筈だ」

しばらく考えてある一つの可能性が浮かび上がったが其れは余り現実的ではなかった

「エレオノーラは既にこの世界にいない、そして自由に世界間を移動できると仮定する、わざわざ外道（ゴッド）に落とした訳は……俺に会わせる為か？　実際俺は雪に眼を与えて人間界に上がらせた訳だし」

ならば、と神のすることは決まった、まずは確認からだ

「《人間界00-0001にエレオノーラ・アルクインはいるか》」

そういうと、リストから全ての文字が消え、ただ一言、『います』とだけ表れた。

「……やっと見つけたぜ、さてと見つけたはいいが、どうするかな
かなり苦労して見つけたはいいが、見つけてからのことを全く考えていなかった。

ふとさっきのリストの中の三人の名前が見えた。

「こいつでも送ってみるか」

神は、見た目に合った子供が悪戯をする時に見せる笑みをみせて、リストに載っていた名前の人、月草孝明を見た。

彼は、雪の記憶で見たときより成長して、今は高校生になっていた。

腕には『風紀』と書かれた腕章を付けていたが、そんなことはどうでもいい。

三人のうちなぜ月草を選んだかというと、ただ戦闘能力が優れていたからという理由だ。

別に送るときに身体強化をするつもりだが、戦闘経験ばかりは与えようがないし（方法はあるが面倒ということとするつもりがない）、元々強ければ、色々都合がいい。

そんな理由で幸か不幸か神の目に留まった男は、都合よく一人で、周りにも誰も居なかったので話しかけてみる。

もちろん声は届くわけがないが、念話のようなもので直接脳に話し

かける

「ふう、まったくスタンガンなんかどっから仕入れてんだ？」

そう呟いたのは、月草孝明、とある高校の第二学年で風紀委員会のNo.2である。

今日もいつもと同じ様に、高校の近く（裏通りなどを中心に）見回っていたら、スタンガン片手に不良30人くらいが話していたので、話を聞いてみると、近くの別の高校へ乗り込もうとしていた。

個人的には「いいぞ、もっとやれ」と言いたかったが、一応風紀委員なので、阻止してスタンガンを没収した。

30個も有ると地味に重い。

「さてと、今日も収穫は無かったし、帰って寝るか」

俺はこの二年間ある人物を探している、いきなり現れて、いきなり消えた中学時代のクラスメートを。

「……エレオノーラ・アルクインの情報が欲しいか？」

その裏路地から立ち去ろうとした瞬間、後ろのほうから声が聞こえた、別にそのこと自体は特別気にすることではない、しかし、こいつは今何て言った？

「今、何て言った？」

一応聞こえてはいたが、確認と、自分の中でざわついた心を鎮め時間を作るために、聞き返した。

「聞こえなかったか？ エレオノーラについての情報が欲しいかと聞いたんだが」

本当に知っているのかという疑問を抱きつつも振り返って、背後の人物を確認するとそこには……誰も居なかった。

「何処に居る？」

「お前からは絶対に見えないところに」

「……それで、エレナの情報というのは？」

この人を馬鹿にしたような言い方にいつもの俺ならキレているだろうが、状況が状況だし、実際に気配すら感じられないのでスルーすることにした。

「現在の居場所」

エレナの居場所、それは俺達が一番探していた情報だった、しかし……

「情報をタダでくれるとは思えにくいのだが」

「そりゃタダって訳にはいかない、こちらの条件を飲んでもらう」

（やっぱりな、さてどんな条件が出てくることやら）

「赤神雪の魂を引き継いだ者の助けになって欲しい」

「……なに？」

こいつ今何て言った？

「雪の魂を引き継いだ奴がまた狙われてる可能性があるから助けに行けって意味なんだが」

「……つまり、雪の来世みたいなのが『また』狙われてるから助けに行けと？」

「そういうこと」

「つまり、雪は狙われて殺されたって解釈でいいんだよね？ そして、勘だが、来世の雪も同じ奴に狙われてると？」

おそらく雪は他殺の方向で間違いないだろう

「……そうだ、で行くのか？」

「行くって何処に？」

「異世界」

……こいつ今何て言った？ 異世界？ ……まあソレは置いといて、どうしても聞きたいことがあった

「……なんでお前がわざわざ他人のために取引なんかするんだ？ 所詮他人のことだろ？」

「俺は、自分の物は大切にするタイプなんだよ」

なぜだか知らないが、その答えを聞いたとき俺はこいつは信じてもいいかもと思った。

「……で、どうやって行くんだ？ 異世界に」

「本気で行くのか？」

声の主は少し驚いたような口調で言う

「ただし、もう一人連れてく」

「斉藤麗華か？、向こうは結構危険なんだけど？」

「そっちも調べてるのかよ、麗華なら大丈夫だって、それに俺だけ行ったら後が怖い」

「わかったよ、じゃあ色々身体能力とかは弄らせて貰うぞ、お前も」

「できればチートの的に頼むぜ、あと、魔法が使えるようになりたい」

「わかってるよ、向こうの言葉とエレオノーラと雪の情報は直接脳に刷り込むから」

「……了解」

「そう不安そうになるな、俺神だし大丈夫だって」

こいつ、神だったのか、そんな雰囲気のようなものが微塵も感じられねえ！

「じゃあ、送るぞ」

その言葉を最後に、俺の意識は闇に落ちた

リスVSアッシュ（1）（前書き）

今更ながらにあらすじと本編が微妙に違ってるのに気付いた

今回は一人称に挑戦してみました。

だがしかし、作者は半日ほど前まで一人称ってどんなの？って感じでした

だから一人称になってないかもしれません。

そして今回は少し短いです

いつまでもタイトルに（仮）を付けてる訳にもいかないんですが、全く思いつかない（泣）

なのでタイトル募集します

リースVSアッシュ（１）

「なあリース、ちょっと頼みがあるんだけど」

今日は闇の日、私はいつも四時間で帰るけど、この日は皆も四時間で授業が終わる日。

ちょうど授業が全て終わって帰り支度をしている時に、アッシュがやって来て開口一番に言ってきた。

「頼みって何？」

アッシュが珍しく真面目な顔をしているので、できる限りは引き受けたいが、一応、内容の確認は怠らない。

「単刀直入に言うと、本気で俺と戦って欲しい、理由は後で話す」

……何を言い出すかと思えば、本気で戦え？

無理に決まってるでしょ

……だけど、少しくらいは本気出しても大丈夫かな？

「……本気は無理だけど、少しならいいよ」

私が無理と答えたとき、アッシュは傍目にもわかるくらい落胆したが、次の言葉を聞いて、いつもの元気を取り戻した

「ホントか！？　じゃあ、やるぞ」

「つて、今から？」

「時間があんまり無いんだよ、場所は教会の裏でな」

いやいや急すぎるでしょってもう行っちゃたし

——教会裏の中庭——

「ルールは？」

「特に制限なし、武器の使用あり、ただし教会にある木製の練習用武器に限る、致命傷なし、くらいかな」

……本気で言ってるのかしら、って言うか致命傷って

「なら、結界張らせて貰うわよ」

「制限なしだから何でも好きにすればいいぜ、それよりリースは武器どうするんだ？ 俺は、これかな……」

そういつてアッシュが取り出したものは……木刀、ただし普通の木刀に鍔と鞘を付けた、特殊目的用木刀とか言われていたものだ
ちなみに、特殊目的とは恐らく抜刀術だと思われる

アッシュはアネット先生に剣を教えてもらっていると言っていた

からアネット先生は刀を使うのだろう。

「なら私は……この二つにしようかな」

「なっ！？ お前それは……」

アッシュが驚愕といった顔をしている。
当然だろう、私が選んだ武器は

普通の木刀と、アッシュと同じ……いや少し小さめの特殊目的用
木刀なのだから

「お前、その使い方わかってるのか？」

「大体わかるよ」

そう答えてもアッシュはまだ疑っている顔をしている。
しょうがない、私は普通の木刀を地面に置き、もう一方を腰のベルトに差して、アッシュに近づいていった

そして、アッシュの前で居合い抜きをして見せる

「……ッ」

「これでいい？」

「……ああ」

まだ驚きを隠せないといった様子だったが、あれこれ質問される

ことは無かった。

(でも多分、終わったら色々聞かれるんだろうな)

そう思いつつ結界を張る準備を進める

最初に張る結界は防音結界、正直これは張らなくてもいいんだけど、そこそこの難易度が高いからカモフラージュ用にはうってつけだ。範囲は20mくらいに指定して一度張る。

そして、この結界に後付で魔術効果付与をしていく

《物理的耐久強化》《魔術的耐久強化》《カウンスターストップ》
《ディレイ・ヒーリング》

特にこの《カウンスターストップ》はかなり重要な魔法だ、一定以上のダメージをカットして精神的ダメージに変換させるという効果を持つ。

当然、精神的ダメージにも限界を超えると精神崩壊につながるの
で、気絶したらストップというように設定してあるが

なぜこんな面倒な方法をとったかというと、理由は唯一つ、バレにくいから、マジックエンチャントで付与した魔術は術式やコードが元の魔術の物と混ざって、見つかりにくいという利点がある、だから魔術師相手の実戦でもエンチャントは有効な手段としてよく使われる。

これで、準備は整った。

手に持った木刀を鞘に納め、代わりに地面に置いた木刀を持つ。

そして、アッシュと10mの間合いを開け、対峙する。

「じゃあリアは審判でもしててくれ」

「審判でもって、あんたねえ……」

リアが頬を引きつらせて怒っていることをアピールしている。
あとでアツシュは悲惨な目にあつことが容易に想像できるが、
いまは無視しよう。

対峙してわかるが、アツシュは恐らく相当強い

「それじゃあ、はじめー!!」

リースVSアッシュ（1）（後書き）

作者「さて、次回どうしようか」

リース「何にも考えてなかったの!？」

作者「いやっ! 違うよ! 少しは考えてあるよ、ただどれを選ぼうか迷ってるんだよね」

リース「……見苦しいうそを」

作者「ホントだって、二、三個あるんだって」

リース「まあ、期待しないで待ってるわ」

外道「なあ、俺どうなったの?」

作者&リース「あっ」

リースVSアッシュ (2) (前書き)

わかったこと、私に戦闘パートの才能はない！(ほかもないけど)

あと多分これもいつか改良するかも

そして私、戦闘のテンポ悪すぎ

あと視点分けに挑戦してみた。

結果、ひどくなった気がする

リースVSアッシュ (2)

side アッシュ

(さて、どういこうかな)

リースと対峙してはや三十秒ほど、二人はわずかに重心をずらしたり、構えを変えるのみで一步も動かない

(初撃は居合いから繋げるか?)

アッシュが木刀を納刀した瞬間……リースが仕掛けた。

右手に持った木刀を素早く逆手に持ち替え、アッシュの左胸を狙い、投擲

「は？」

アッシュもまさかいきなり武器を投げてくるとは思いもしなかったので反応が遅れる

さらに、線の攻撃ではなく、突きと同じく点での攻撃であるため、木刀で受け止めることも難しい。

アッシュのとった行動は居合いによる切り上げで弾くことだった

なかなかの速度で飛来する木刀の先端より僅かに奥を居合いで左前へ弾く。

そしてリースを見るも、リースはもう既にアッシュの前1mほどのところへ迫っていた。

（神速……いや水無月か？ どちらにせよギリギリで避けるしかないか）

《水無月》

神速とは別の身体操作技術、主に高速移動に使われる。

実際の速度は神速に僅かに劣るが、急停止や速度に緩急を付けることが可能なので、観測者には実際よりも速く見せることができる。攻めの水無月、守りの神速と呼ばれている

リースがアッシュを攻撃範囲に入れ、右フックを放つ。

（なっ……素手！？）

自分は体制を崩しており、絶好のチャンスなので抜刀による必殺の一撃が来ると予想していたが、リースが放ったのは素手での一撃だった。

しかし、アッシュもそれを見切り、屈むことでなんとか避けることに成功する。

そしてアッシュが体制を立て直そうと顔を上げると……目前に先ほどアッシュが弾いた木刀が迫っていた。

（ちっ、さっきの右フックは罠で、本当の目的は弾かれた武器で、追撃することか？）

実際には右フックも一撃で気絶レベルの威力を秘めた本命の一撃だったのだが、アッシュにそれを知るすべは無い。

アッシュは目前に迫った木刀を自分の木刀で受け止め、リースが放ったスピードを殺さずに木刀の反りを使ってリースの木刀を上へ滑らせて斬撃をいなし、リースを無防備にすると、左回り回転で懐へ潜り込み遠心力を付けた裏拳を放つ。

アッシュの放った裏拳はリースの脇腹を捉える軌道だったが……

「《アイスウォール》」

リースが呟くように言い放つと同時に、リースを守る盾となるように分厚い氷の壁が出現する。

いくらアッシュの裏拳が遠心力を加えたものであっても、リースの出現させた壁を抜くことは普通ならば不可能であることは誰の目から見ても明らかなものだったので、リースの思考はこの攻撃が止められた後のことに向いていることは仕方が無いことだろう。

なので、リースはこの壁が抜かれることを想定していないことは、アッシュにとって絶好のチャンスとなった。

（この技が成功する確率は低いが、ここで使わずいつ使うんだよ！）
「行くぜ！ 楯破烈衝！しゅんはれつしょう！」

そしてアッシュの拳はそのまま氷壁にぶつかり――

――いとも簡単に分厚い氷壁を砕いた。

「——え？」

全くの予想外の事態に何の反応もできないリースの脇腹に、氷壁を砕いた速度そのままのアッシュの拳がめり込む。

「……うつ」

リースの端正な顔が激痛に歪むが、脇腹を強打した拳は止まることなく振り抜かれ、リースの身体を3メートルほど弾き飛ばし

ザザアア！！

しゃがんだ体制のまま着地し、地面をすべり停止した。

(……やべえ、手加減し忘れた、リースのやつ大丈夫か)

そんなことを考えていると、しばらくしゃがんで顔を伏せてぴくりとも動かないリースから、かすかにうめき声のようなものが聞こえてきた。

「……うつ……ぐすつ」

(……えっ？ あれ泣いてね？ てかヤバくね？)

side out

side リース

「……ううつ、痛い……ぐすつ」

あまりの激痛にリースの目に涙が滲む。

いくら吸血鬼といえど、岩すら砕きかねない威力を秘めた打撃を
急所にくらえば無理も無いだろう。

普通の八歳の子供ならこの時点で試合の続行は不可能だが、リ
ースは痛みを堪え立ち上がった。

「……さっきの技、なに？」

いまだ涙目になりながらも先ほどの技、楯破烈衝についてアッ
シユに問いかける。

「……楯破烈衝、アネット先生に習った技だ、よくわかんねえけど
確か、ソレが盾の意味や役割を持つものなら問答無用で無効化し、
ソレとぶつかるときに起こるはずだったエネルギーを自分の攻撃に
上乗せさせる、だったかな？」

（……なんというチート効果！）

果たしてアッシユはこの効果のことちゃんと理解しているのだろ
うか。

それが本当ならば、極めればその効果が無効にしない限り、いか
なる伝説級の盾も意味をなさない最強の一撃となることを。

（それ絶対、一流派の秘奥クラスの技だよね？ アネット先生ちょ
っと早すぎない？）

「俺のほうも聞きたいんだけど、さっきのアイスウォール、発動が早すぎないか？」

「ああ、あれは遅延魔法であらかじめストックを作ってたのを解放したのよ」

……嘘であるが。

実際にはバカ魔力と高速演算にものを言わせた詠唱破棄であるが、いささか反則気味なので本当のことは言わなかった。

「さて、痛みもだいぶ治まってきたし……いくよ」

今までの会話はリースにとっては吸血鬼の高い回復力を使うための時間稼ぎの意味合いも持っていた。

そして――

――リースから魔力とが解放され、リースの身体を纏う。

「……ッ 相変わらず何というバカ魔力」

「うるさい、《フレイム・バタフライ》」

魔法の発動キーワードとともにリースの足元に赤色の魔方阵が浮かび上がり、大量の蝶の形をした炎が召喚される。

「いきなり詠唱破棄かよ！」

このフレイム・バタフライという魔法はリースのオリジナルの魔

法であり、文字どおり炎の蝶を呼び出す魔法である……大量に。

この蝶は術者の意のままに操れることができ、何かに接触した瞬間、炎上したり爆発したりする、さらに大変素早いので陽動・追尾・封鎖などに優れている。

一匹ごとの威力もそれなりにあり、自爆による目くらまし等の使い方もある。

ちなみに、大量に呼び出す場合は術者の演算が大変なことになり、脳が焼き切れるので、召喚する数には注意が必要である。

大量に召喚された炎の蝶は渦を巻くようにアッシュに接近する。

「……くっ」

とりあえずジャンプして包囲網から逃れようとするも、すぐに囲まれる。

この場合、リースが予想するアッシュ行動としては、蝶をすべて消すか、蝶を回避しつつリースに攻撃を仕掛けるかの二択に絞る。

そして、今まで移動するアッシュを追うように移動していた蝶の動きに変化が現れる。

上への移動を封鎖するように上空に大量の蝶を配置して、アッシュの右から五羽、後ろに八羽、左に二羽、アッシュからリースまでの道は空けておくように配置し、それぞれを接近させる。

（……どうする、畏の可能性が高いがリースに突っ込むか？）

その考えが頭をよぎった瞬間、リースが魔力による高速直射砲を放つ。

（なに！？　ならばよりダメージの少ない左か）

思考と同時に左へ跳び、魔力障壁を全開ではる。

そして蝶と接触する瞬間――

――すべての蝶が消えた。

（よし、かかった）

リースは法力を解放し、両目に集中させ、アッシュを見る。

（――！？　身体が動かない！）

アッシュの身体は地面から20cmほど浮いた状態で静止していた。

「これは、《呪縛の邪眼》か！？　お前法術まで使えんのかよ」

「そう、これは、教会の騎士団がよく使う呪縛の邪眼、しばらく行動を封じさせてもらっよ」

《呪縛の邪眼》

教会騎士団の暗殺術。

元々は悪魔アタルクスの邪眼のことを言う言葉だったが、ある騎士が法力を用いてそれと似た効果のあるものを開発したことから、騎士団で使われるようになった。

効果は、視界に入っただけのものを拘束するというものだが、拘束するものは液体、固体、気体と形状を問わない。

さらにオリジナルの邪眼は《アスタルクスの魔眼》と呼ばれるようになり、その効果は、模造品よりもさらに拘束力が高く魔力や空間そのもの、果ては概念すら拘束・固定することができるといわれている。

このときリースが使ったのはオリジナルの《アスタルクスの魔眼》であり、法力を解放したのは、模造品に錯覚させるためのフェイクである。

「――二……五……一……九……四……三――」

リースは掌を天に掲げて、不規則に数字を唱えていく。

アッシュもつられて頭上を見るとそこには先ほどまでは晴天だったのに今は自分達の上空にのみ、雲が広がっていた。

「――八……一……三……二――！」

そしてリースは掲げた手を振り下ろす。

「《雷龍招来》！！」

振り下ろされた手に呼応するように頭上の雲から雷を纏った一匹の龍……いや、龍の形をした雷が、アッシュを目掛けて落ちてきた。

「……は？ いやこれ死ぬだろ、冗談抜きで」

そう言いながらも半ばヤケになって障壁を頭上に一点展開して、ただ待つのみ。

龍が落ちてくるまであと3……2……1

ズガアアアン!!

轟音とともに落ちてきた龍は、アッシュの障壁を突き破り、地面に穴を穿った。

アッシュはというと、障壁を破られた後、龍は微妙に曲がり、直撃はしなかったものの、衝撃で吹っ飛ばされて気絶していた。

s i d e o u t

リリース 1 (絵の紹介です)

今回は、作者のお友達に描いてもらった絵を紹介しようと思います。

まず一枚目はこちらです(全部で二枚あるよ)

> i 2 5 4 8 5 — 3 1 3 4 <

……おう、見とれちまつたぜ

できればデジタルで描いてもらいたかったんですが、文句は言えません

多分八歳前後あたりかな？

次、二枚目

> i 2 5 4 8 5 — 3 1 3 4 <

か、かつこいい……だど？

しかし、ポニーテールか、なぜこうなった？

うん、ポニテ好きだけどさ。

あと、リボンがなんかかわいらしいね。

何も言っていなかったけど、何歳くらいなのかな？
大人っぽく見えるけど

再会（前書き）

どうしてこうなった

大分間を開けてかいたので矛盾とかあるかもしれませんが
教えてくれると助かります

再会

「……ねえ、アッシュ大丈夫なの？」

今まで観戦していたリアが尋ねてくる。

言ったら否定されるだろうけど、とても心配そうにしている。

まあ他人から見たら雷が直撃したように見えるから当然だけど。

あと、なんで直撃させなかったか言っと、アッシュ自体にはダメージは残らないけど、服が……ね。

「大丈夫、ちゃんと外したから気絶してるだけ……多分」

……しょうがないじゃない、初めてつかったヤツだもん。

「……いてて」

あ、起きた

「……あゝ、俺の負けか、やっぱりススげえな、まさか雷落とすとは思わなかったぜ」

……やめて、耳が痛い。

本当はあんな反則魔法なしで勝つつもりだったけど、ちょっとキレて本気出したなんていえない。

「そ、そんなことよりも、理由聞かせてよ。
終わったら話すって言ったじゃない」

そう、まだ私はアツシュから試合をする理由を聞いてない。

「ああ、そいえばそうだったな」

アツシュはまるで今思い出したように言った。

「じつは、俺この街出てくんだ」

「……え？」

いま、なんて言った？ 街を出てく？

「そっか、アツシュも出てくのか」

それまで黙っていたリアが口を開いた。
その口調は驚いたモノでは無く、どこか安心したような感じもする。
その中で一つ引つかかる言葉が混じっていたことに気づく。

「……リア？ アツシュもってどういうこと？」

そう、この『アツシュも』という言葉、これはまるで自分もそうだと
言っている様に聞こえる。

そして、その問いは裏切られることなく、リアから答えられる

「本当はもう少し隠しとくつもりだったんだけど、今言うことにするね」

私ももうすぐこの街をでるんだ」

「……二人とも隠してた事を責めるつもりは無い、でも、理由を教えて」

二人が自分に隠してた理由はなんと無くわかる、だから責めるつもりも無いし、二人の選んだ道だから止めるつもりも無い、しかし、これだけは聞いておきたかった。

「強くなるために！！」

二人から出たのは同じ言葉、その表情からは、確固たる意思が容易に読み取れる。

「リースには言って無いけど、私達にはそれぞれ絶対にやらなければいけない事があるのよ」

「それをするために俺はアネット先生が刀を習った第3大陸へ」

「私は、最も魔法技術が発展していると言われていた第8大陸へ行くの」

「大陸を超えるんだ……」

この世界では大陸を超えるなんて人は、名の知れた行商人が冒険者くらいのもので、たいていの人は自分の住んでいる国の領土から出ることなく一生を終える。

そのため、その国の人は自分たちの使う言語以外を知らない場合

がほとんどなんだけど……

（リアはしっかりしてるから大丈夫だとは思うけど、アッシュは大丈夫かな？）

「ねえアッシュ、今更だけど向こうの言葉「気合だ！」……え？」

「たとえば言葉が通じなくても気合で何とかなるってアネット先生が言ってたぜ！」

「……ああ、そうなら大丈夫ね」

リースは思考することをやめた。

（やるべきこと……か）

リースは今帰宅すべく街の大通りを歩いていた。

しかし、その様子は心ここにあらずといった様子でいかも危なっかしく見えた。

そんな様子なので当然目の前に注意を払うことなどまったくして
いないので必然的に……

——ドン

「あ……」「おっと」

このように人にぶつかる。

「あら、だいじょうぶ?」

「はい、だいじょうぶで……す」

その人は、歳は十七、八くらいの少し長めの金髪で、綺麗な青色の目をした女性で

緑色のローブのようなものを纏っていた。

そして、私はこの人に見覚えがあった

「お嬢ちゃん、ちゃんと前見なきゃ危ないよ」

「はい、すみません」

表面上は何でもないように装っているが、内心は大きく動揺していた。

なぜなら彼女はここにいるはずが無いのだから。

自分にこれは他人だ、と言いつけてもすぐに疑惑が浮かぶほどに彼女は似すぎていた。

「じゃあ、これから気をつけるように、じゃあね」

そうついい残して、彼女は大通りから外れて、街の西部へと繋がる裏通りへと入っていった。

「……」

リースは街の裏通りを歩いていた。

そこは太陽の光が届きにくく、道はかなり狭いので、歩きにくいことこの上ない。

しかし、リースの前に行く彼女はどこか歩きなれた様子で、進んでいく。

リースは今この女性を尾行していた。

（なにやってるんだろ……私。もし仮に彼女だとして、それからどうするかなんてまったく考えてないのに）

そのとき、突然前の女性が走り出す

（……ッ 尾行がばれた？）

とはいってもまだまだ目視できる距離である（リースにとっては）ので二拍おいてから後を追いかける。

進路は曲がり道を左に右にと曲がっていく。

（この進み方……やっぱりばれてたか）

と、急に裏路地から抜け、開けた場所へと出る。

「何か用かしら？ …… あなたはさっきの」

そこは空き地になっており、周りは家の壁などでふさがれており、唯一の出入り口が今通ってきた裏路地である。

その空き地の中央にこちらを見据えた先ほどの女性がいた。
ただし、先ほどは青色だった目の色が、今は深い赤色に変色しているが。

「もう一度聞いわ、何か用かしら？ …… 雪さん？」

（……ッ 間違いない、やっぱりこの人、エレアノーラ・アルクイン！）

「ああ、その表情……どうやらあたりのようですね、よっぽど私たちは縁があるんでしょうか？」

「どうして私が雪さんの転生者だとわかったのですか？」

「さあ、どうしてでしょう。それより雪さん、元の口調に戻ったらどうです？」

「……？」

この人、なに言ってるんだろ。

「いや、だから……まさか、あなたは赤神雪じゃないの？」

しかもいきなり焦りだした。

「赤神雪の記憶は持つてるけど、本人ではないわよ」

そういうと、なんか手を頭に当てて、あちゃーとか言ってる。
まあ、私にとってそんなことはどうでもいい。

「エレナさんあなたは何で雪さんを殺したんですか？　そしてなぜあなたは「この世界にいるのかって？」……そうです」

「なぜ雪さんを殺したかについては今は話せないわね、もう一つのほうは、次元を超えたってところかしら」

「次元を！？」

「じゃ、今度は私の質問ね、あなた名前は？」

「……リース・オフィリアです」

「リースね。……さて、おしゃべりはここまでにしましょうか、今のあなたには用はないので、死にたく無かったらもう私に関らない方がいいわよ」

「なっ！？」

だったらなぜ名前を聞いた、と問い詰めたい。

「あたなは弱すぎるのよねえ、まだ私に……私たちに関るつもりなら今よりもっと強くなることね、さもないと死ぬわよ」

ひ、人が黙ってればすき放題言ってくれて……

「弱いかどうか、いまここでわからせてあげるわ!」

「あら、怒らせたかしら? いいわ、かかってらっしゃい」

「……ふっ」

身体を脱力させ、重力に逆らわずに前方へ倒れこむ、そして倒れこむ力を利用して加速、一気にエレナとの距離を縮める。

「へえ、スピードはまあまあね」

そついいつつ、しっかりタイミングを合わせてカウンターを狙いにきている。

一瞬エレナの前で足を継いだ瞬間、横へ急加速して背後へ回り込む。

「んっ、消えた……後ろ!」

一瞬動きが鈍ったけど、即座に対応して小さく足を払ってくる。

まるで予知していたかのように私が移動したところを払われ、体制を崩される。

そしてそのまま強烈な蹴りで吹っ飛ばされる。

空中で体制を整えようとした瞬間、追いついたエレナにボディーブローを決められ、更に加速して吹っ飛ばす。

今度は受身を取る暇も無く身体の側面で地面を滑りながら減速する。

「結構おさえたつもりなんだけどなあ」

腹部を押さえて立ち上がるリースを眺めながらポツリとこぼす。

「まあいいか、それじゃ、おやすみ!!」

立ち上がったはいがいまだふらついているリースに止めの一撃をおとすために距離を詰めようとした瞬間

上空から紅色の魔力を纏った衝撃波が飛来する。

「……そこまでです」

遠のいていく意識の端で聞きなれた男性の声が聞こえた、だからどうするといったこともできずに意識を失った。

次の瞬間、リースは目を開いてすばやく起き上がり、臨戦態勢をとって周りを見渡した。

周りにはエレナの姿もなく、最後に声を聞いた男性の姿もなかった。

それよりも。

……ここはどこだろう。

視界に入るのは何もないただ白一色、下も白上も白で地面や空（あるいは天井）があるのかすらわからない。

「……まるで雪さんと神様が会った場所みたいね」

ほとんど無意識に思ったことをつぶやく。

「同じではないけれど似たような場所かな」

「……ッ 誰！」

振り返って見ると、先ほどは誰もいなかったはずなのにそこには両目を閉ざした一つの人の姿をした何かと、一匹の黒い魔物がいた。

「俺たちが誰か……か。」

それはまた難しいことを聞く。

それにしても人の姿をした『何か』は少しひどくないか？」

普通に心を読まれてるし。

うん、まあこんな空間で出会ったのだからそうだろうとは思ってたけど……

「お前はまだいいだろ、私は魔物だぞ？」

心を読むなというなら読まないようにするがどうする？」

あ、ON・OFFできるんだ

「……どちらでも。」

「というか、あなたたちは何なんですか!？」

「まあまあ、そんなことは置いておいて、リース、君はなぜここに来たんだい？」

「……どういう意味ですか？ 私は気絶して気がついたらここにいたんですけど」

「ふーん、なるほどねえ」

とりあえずそのむかつく顔を何とかしてくれませんか？
殴りますよ。

「おっと、怖い怖い、そろそろ本題に入ろっかな。
単刀直入にいうと、力欲しい？」

「……いきなりですね。
答えとしてはNOですね、強くはなりたいたいですけどこれ以上他人からもらう力なんていりませんから」

「強くはなりたいたんだ。
その必要はないと思うけどな？」

「確かに、今のままでも十分だと思いますけど、エレナと同等になるくらいは強くなりたいです」

普通に暮らすだけならばたとえ異世界といえども今のままで充分だろう。

しかし、今はその充分では足りないと思わされた。

「そういう意味じゃなくてさ、抑えてるの出せば？」

その言葉を聞いて、私はここがどこで彼らがなんなのかを知る

「……そういうわけですか」

「あ、俺たちのことわかつちゃった？」

「あなたが眼をずっと閉ざしているのもある意味ヒントですよね？」

「……で、どうする？」

今まで黙ってた黒い魔物が私に問いかける。

「……それでは、今回だけ」

「了解した。わかっていと思うが、あまり深く吞まれたら戻ってこれないぞ」

「わかってます、そういうばあなたちことはなんて呼べば――」

そこまで言って、リースはその空間から姿を消した。

「……む？」

この魔物が入ったならば多分顔をしかめたというような表情をしただろう。

「どうしたよ？」

言葉ではそう問いつつも、その表情からは無関心がよみとれる。

「いや、分量まちがえておる」

「……やばい？」

「いや、危ないところだが、まだ大丈夫だ」

「そっか」

「そこまでです」

衝撃波が着弾した際に撒き散らされた砂煙が晴れた時、エレナとリースの間に一人の男が立っていた。

リースの方を確認すると先ほどの衝撃波の余波を受けて気絶しているようだ。

「あなたは……お久しぶりですね、アレン・フェガリス神父」

「はて、私にあなたのような知り合いはいないはずですが」

この男は……相変わらずわざとなのかは知らないけど人を怒らせる天性の才でもあるんじゃないかしら。

「そうですか、なら、これでわかりますか？」

エレナが手を前にかざすと空間が歪み、一本の槍が現出する

「ああ、まだ生きていたのですね、エレナ」

「ええ、幾度か死に掛けましたけどね（あなたのせいで）」

「しぶといですね」

この男は、笑顔でなんてことを言うのだろう。
本当になんで神父になれたのか不思議に思う。

「うるさいです。さて、あなたが出てきたならあまり長居はできませんね」

「にげますか？」

あつ、これ挑発ですね……乗りませんよ？　ちょっとこいつ血祭りにあげたいかと思ってませんよ？

「止めますか？」

とりあえず、こちらも挑発で返すことにしました。乗ってきたらどうしようとかちょっとドキドキしますね。

「いいえ止めませんよ？　どうぞお好きに尻尾を巻いて逃げてください」

（チツ、この万年笑顔の腹黒神父が）

「……やっぱり、一撃だけいいですか？」

「どうぞ、どれだけ成長したか見てあげます」

「夜天を切り裂く闇の雷帝　汝の力もて　わが敵に滅びを与えん」

私の紡ぐ力を持つ言葉に呼応するように手に持った槍が雷を宿す。

「《魔槍・メルベナ》」

そして、その山をも軽く消し去るほどの威力を秘めた槍を投擲する。

しかし……それがアレンに届くことはなかった

「……え？」

それはいつの間にか間に入ったリースが掴み止めていた。

その表情は顔を伏せているので見えないが、槍を握っている右腕を除いてだらんと脱力しておりどこか不気味さをかもし出している。

そして、ここからでは聞こえないが何かをつぶやいたようにみえた。

その瞬間——甲高い音が鳴り響き、掴んだメルベナが砕け、塵と化した。

そして、リースが顔を上げた。

その表情には特に感情が浮かんではないが、無表情のように冷たい感じではない。

そしてその瞳はエレナと同じ深い赤色になっていた。

「……分析……完了。」

右腕の聖痕

ステイグマ

を媒介とした固有魔術《幻槍生製》

人間界・魔界・神界に存在し、術者が理解した物を複製・現出させる魔術」

聞こえたのは決して少女の口からは出ないような暗く、重い声だった。そんなことよりも私はその言葉自体について意識が向いていた。

「なんで……」

わかったという暇もなく。

「汝、千の棘の名を冠すもの　すべてを滅する煉獄の一杭　汝が力我が手に集いて　敵を砕く槍となれ」

……あれはヤバイ。

なぜ私の固有魔法を使えるとかそんな疑問など些細なことと思わせるほどに頭の中が警報を鳴らしている。

「《魔槍・ロニクス》」

現れたのは長さ二十センチほどの短槍。

こちらに照準を合わせた状態で空中に浮かんでいる。

一見すると変わった形をした槍だが、当然ただの槍ではない。

その槍は詠唱の通り千の棘、うまく当てれば神すらも殺せると言われているほどの危険性を秘めている。

「……やれ」

その一言を合図に、静止していた魔槍

ロニクス

がヒュッという風切り音を鳴らして矢のように飛ぶ。

へ半円型防御魔術

サークルプロテクション

ー

とりあえず、避けずに全方位をガードできる防御魔術を全力で張る。

そして、飛来した槍が防御膜にふれた瞬間……小規模な爆発が起こった。

しかし、安心することはできない、まだ相当の数の槍が残っているのだから。

最初の爆発が起こった後、先ほどの風切り音を何回も聞いた。

そして爆発、私の身体から五十センチほどのところで連続的に小規模な爆発が起きる。

せめてもの救いは、ロニクスは操作性に優れているので、膨大な演算処理を行う。

そのため他の事が一切できない弱点があることだ。

防御膜に魔力を流し続けていれば、この程度なら防ぐことができ

る。

さらに、ロニキスは他に比べて魔力の消費が激しいものなので、このまま行けばいずれ魔力が尽きるはず。

一応その後のことに備えて炎の矢

フレイム・アロー

を遅延魔術

デイレイ・マジック

でストックしておく。

（いろいろと気になることはあるけど、今は守りに徹するしかないか。

しかし、ぜんぜん前が見えないわね、一回リリースの様子を見ておきたい……？）

そこまで考えたところで、意識が目の前の事象に引き戻される。

（気配？ アレンは多分動かないだろうし——）

そのとき、いきなり側頭部に衝撃を受けて思考を中断される。

しかし、エレナも経験から無意識で衝撃を逃がすように受けたため、ダメージはそれほどではなかった。

視線を向けるとそこには、先ほどと同じ無表情、しかしどこか狂気を感じさせるリリースがいた。

「あなた、どうして……」

動けるのか、と言葉に出す前に右から短槍が迫るのが見えた。そして、その短槍に合わせるようにリリースもエレナに迫る。

「はあ、なにがどうなってるのよ……《魔槍・アシュヴァル》」

とりあえず、確かめたいこのもあるので、一本の長槍を出して、短槍を破壊する。

そして、リースの背後へ回り込み、横薙ぎに振るうも当たる寸前でその姿が掻き消える。

まったく見えなかった。

先ほどまではスピードにおいて絶対的な差を見せたエレナがまったく視認することができないほどに速かった。

槍を振りぬいた直後の状態を狙われ、エレナに《黒》を纏った小さな肘が突き刺さる。

そこから先は一方的だった。

ほとんど無抵抗に防御に努めたエレナに少しずつダメージを与えていく。

その表情は無表情ではなく、かすかに笑みが張り付いていた。

「これは、本気でまずいわね」

かなりのダメージが蓄積されたが、エレナも並みの吸血鬼ではないのでまだ余裕があるが、それでもこのままではいずれ削りきられることを予想していた。

（それにしても、まさか黒色とは、この子も《アレ》を使えるのかしらね）

思考を巡らせながらも、確実にかつ的確に攻撃を捌いていく。

まともに食らえばしばらくその部分は使えなくなると簡単に予想できるので、ガードして受け止めることはできない。

いつまでもガードを崩せないことに痺れを切らしたのか一旦距離をとって力を溜めている。

(……チャンスね)

リースが踏み出す一手前に私はあらかじめストックしておいた炎の矢を打ち込み、隙を作る。

そして、大きく距離をとり、この場から離れる為に転移石を取り出す。

だが、甘かった。

炎の矢を打ち込んだ程度では隙を作ることすらできなかった。

リースは身に纏った《黒》を更に色濃くし、炎の矢などには目もくれずに前進。

炎の矢は確かに命中したが、身に纏った《黒》に阻まれ、爆発のエネルギーもすべて包み込んで無効化してしまった。

そして、私は転移に集中しなければならぬので完全に無防備な状態。

(……ッ 間に合わない)

リースの拳がエレナに届くあと一步と言ったところで、二人の間に入る人がいた。

それは今まで見ることに徹してきたアレンだった。

アレンはリースの拳を左手で受け止めて掴み、側面に回り込み右手の手刀で首筋を打ち、アッサリと気絶させた。

「まさか、貴方に助けられるとは思っても見なかったわ」

「そうですか？ まあ、そんな時もありますよ。
さて、そろそろ帰りなさい」

「……はい」

エレナは中断していた転移を再開し、準備が整ったところでアレ
ンの顔を見た。

その表情はいつもと同じ様に笑顔。

（いつか、その仮面を引き剥がしてやります）

そんなことを考えながら転移を開始し、エレナの姿は消えた。

「リースちゃん、起きてください」

「う、ううん……」

先ほどアレンが飛ばした衝撃波によってまたもや吹っ飛ばされて
気絶していたリースに、アレンは治療をしながら起こす。

しかし、まったく起きる気配が無い。

そこで、アレンはあることを思いつき、それを実行するために、
リースの耳元で何かをささやいた。

「……はっ、あれ？ アレン神父どうしてここに？」

その言葉が耳に入った瞬間、リースは跳ね起きた。
さつき行ったことは、言葉に乗せた魔力を相手の体内に送り込む
方法で、体表面から送り込むよりは、危険性が少ない利点がある。
発する言葉は、聞かせるものにとってできるだけ衝撃的なものの
ほうが好ましいらしい。

「……散歩です」

多少の間があつたが、いつもの笑顔で普通に答える。

「こんな裏通りをですか？」

「散歩です」

「いや、でも……」

「散歩です」

「……はい。」

えーと、あっそくだエレナは！？」

「帰りましたよ。」

それと、何があったかは知りませんが、彼女に関するのはやめなさい。あなたにはまだ早すぎます、さっきのでもうわかったでしょう」

「うつ……それでも、私はエレナに聞きたいことがある」

少し、声色を強めて叱る様に言うが、それでも負けじと返してくる。

そして目を合わせることに数秒

「ふう、厄介なところがフィンレイから移りましたね。」

しかし、エレナに関しては今のままではダメですよ」

「うんわかってる……アレン神父！」

「お断りします」

「……せめて最後まで言わせて」

最後まで言わせてもらえずに拒否された。

あなたは読心術でも……使えそうだ。

「鍛えろ、というのでしょうか？ 気の毒ですが私は色々忙しいのですよ。」

それに、私が鍛えるよりも、学園へ行ったほうがいいでしょう」

「学園って何ですか？」

「それは後で話すとして、いきますよ」

「行くつてどこへですか？」

「あなたの家ですよ」

――

「お帰りなさいませ、リース様……と、ああアレン神父何か用ですか？」

「ただいまアニス」

門の前でアニスが待っていた、今日はこんなにも遅くなることを知らなかっただろうし、長く待っていたなら悪い事をした。

あと、何故アニスはアレン神父を見ると不機嫌になるのだろうか、不思議だ。

「ええ、少しフィンレイと話す事がありました」

「……どうぞ」

アニスは何か迷っている様子だったが、門を開けた。

門を通り、屋敷までの道を通る時に、無駄に豪華な修飾の馬車を見つけた。

特徴といえば、蝙蝠の飾りが少し印象てきだろうか。

（他の貴族でも来ているのかしら？
アニスが迷っていた理由はこれ？）

道を抜けて玄関へ着く。

そして、アニスが扉を開けて中へ入ると、金髪の男性の姿が見えた。

扉が開いた音で気がついたのか、男性がこちらを向くのと、私の後ろからアレン神父が入って来るのは同時だった。

「お、お前は……何故お前がこの屋敷にいる！？」

男性は責める様な口調で疑問をぶつけて来ます、そして、それに答えるのはアレン神父。

「今日は古い知人によく会いますね。
さて……私がここに居るのがそんなに可笑しいか？ 小僧」

……この人誰

再会（後書き）

本当にどうしてこうなった、某週刊誌じゃ無いんだからこの展開は無いだろう

まあいいか終わったことだ

あとキャラ振れして無いか心配だ、ノリで書いたし

あと最後のアレン神父、誰だよあれ

まあいいか（ry

あと、魔法とかの元ネタわかった人どれくらいいるか気になる

親族（前書き）

・・・勢いで書いた結果がこれだよ
なんか短いけど時間がないのでしょうがない

親族

「そもそも貴様、今まで何処に居た！」

「暫くこの街にとどまって居たがそんな事も分からないとは、情けない。」

自分の領分の事くらい把握しておけ」

見た感じ、謎の金髪貴族？の方が攻め立てて、アレン神父が受けながら挑発という感じの争いが何度か――

「何だと貴様！ 大体教会なんぞに身をおきおって、吸血鬼の恥さらしが」

「何だとしてめえ！ 小僧のくせに生言いやがって、大体てめえは何時までも考えが古いんだよ！」

――訂正、どちらも大して変わらない気がします。

（……これ、アレン神父よね？ と言うか。
その外見でそこその御歳の方を小僧ってあなた何歳ですか）

半ば呆然としてそんなことを考えていると、ふとアニスの存在を思い出す。

（そうだ、アニスなら何とかしてくれるはず……）

後ろにはいないので目の前の論争？から目を離してあたりを見渡すと、二階へ続く階段の前に立って、手でこちらに来いと合図を送

つてきた。

……この二人は放置なのだろうか。

とりあえずこの場にいて私にできることは無さそうなので、アニスに従うとしよう。

「ねえアニス——」

「あの二人なら大丈夫です、いつもああですから」

ということはわりとなかいいんだ

「——なら良いけど」

「それよりも早くお部屋へ、少し時間が押してますので」

「何で部屋へ？ 今日何かあった？」

いつもならこのまま居間へ行つて夕食になるはずなんだけど……

「説明は後でしますので」

……そんなわけで私の部屋にいるんだけど。

「ねえアニス？ このドレスは何かしら？」

そう、私は部屋へ着くとすぐに今身につけている黒いドレスを着

せられた。

うん、まあエレナとの時に思いっきり地面滑って服汚したけど、ドレスって。

「今日はこれを着てもらいます……それと」

アニスは私を上から下まで見渡すと黒いリボンを取り出した……
一体どこから出したのだろうか。

「……一応聞いておくけど、そのリボンをどうするのかしら？」

リボンといったら何かを包むか縛るしかないのだろうけどこの場合は縛るではないほうであって欲しいと願う。

って、今気づいたけど気が動転しているのか服装のせいなのか言葉遣いが……

「なにをわかりきった事を、さあ後ろを向いてください」

少し強めに言われてしまった。

渋々後ろを向いて姿見の中の自分と対面する。

(……似合っているの……かな?)

側面からも見たくて少し動こうとしたら。

——ガシッ

……肩を掴まれた。

「しばらくじっとしていて下さい、上手く結べませんので」

服装に気を取られていてアニスが何をしているのかまったく見ていなかった。

鏡越しに見るとリボンで髪型を変えているようだった……髪型？

「ちよつとアニス、髪はいいから！」

「いけませんお嬢様！ 髪は女の命というでしょう。

つまり髪を魅せる髪型は命と同じくらい大事なのですよ！」

……なにこのとんでも理論

アニスってこんなキャラだっけ。

そんなこんなでいつの間にか髪はリボンで……なんていったかなこの髪型

ハーフアップだっけ？

銀色の髪に黒のリボンが目立っている。

「さて、準備も整いましたし、大広間へ行きますよ」

「大広間へ……？」

普段大広間はオフィリア家で使われない部屋ナンバーワンに数えられる部屋にあたる。

その大広間を使うことに、謎の貴族の客人、拳句には私の服装。予想できる答えはだいぶ絞られたといえるだろう。

パーティあたりが妥当なところではないか。

（うわ、私パーティなんて見たこともないし……というかなんで屋

敷の皆は何も言わないのよ。

なに、サプライズパーティーでもしようっていうの？)

と、かなり混乱した頭で考えるが。

このときの私は仮にサプライズならアニスが私に悟らせる材料を与えないということに気づかないほどに混乱していた

さて、私はいつの間にか大広間の扉の前までたどり着いていた。

ここまでの道のりは自分の頭の仲で意味のないことを考えていたから覚えていないし、特に何も起こらなかったから覚える必要もないことだろう。

先ほどまで少し後ろを歩いていたアニスはいつの間にか消えていた。

たぶん考え事をしている間にほかの仕事に移ったのだろう。

(とりあえず、中に入ろう)

いつまでもここににいるわけにもいかないので、意を決して少し大きめの扉を開ける。

そこにいたのは、まず私の生みの親であるフィンレイとエリス。

それに先ほど玄関で別れたアレン神父と謎の金髪貴族。

それとやたら威圧感のあるおじ様と金髪貴族の妻と思われる女性に多分その息子。

以上七名が大広間のど真ん中にテーブルを置いて椅子に腰掛けていた。

そして、その人たちを支配していたのは沈黙。

それも誰かが滑ったときの苦笑いが合いそうな沈黙ではなく、重苦しいタイプの沈黙。

(……入りたくない)

このまま扉を閉めてダッシュで逃げたい衝動に襲われたが、扉が開いた音で気づいたのだろうか、父様に気づかれ、手招きされた。なるべく音は立たないように気をつけたのに。

手招きに応じて近くまで来たら無言で隣の席を引かれたので、潔くそれに座る。

しかし、ここまで無言だと居心地の悪いことこの上ない。

結局自分でこの空気をどうにかすることなどできるはずもないので、仕方なしに髪を弄って暇を潰していると。

ゴーン　ゴーン

唐突に八時を知らせる鐘が鳴り響いた。

「さて、こうして十年ぶりに無事親族の顔を合わせる事ができてうれしく思う」

鐘が鳴り止んだ後無駄に威圧感のある方が口を開いた。

……親族？

私が驚いた顔をしていると腕を小突かれた、父様にだ。

顔を向けるとその端正な顔の片目だけを一瞬パチツという音が聞こえそうな感じで瞬きする。

つまりはウインクだ。

そしてその瞬間理解した。

これはサプライズではあるがパーティーではなく、親族会だったのだ。

アニスは当然私も知っているのだろうと思っていたのだろう。

……父様恨みますよ

親族（後書き）

しかし時間の進まない小説だな。

次くらいには旅立ちを書くと思ってたが

あと、どなたか服装のことや髪型、その他小物について教えてくださいますか？

従兄妹（前書き）

サブタイてきとうなんで意味はありません

今回は最後がやりたかっただけなので正直書かなくてもいい内容な気がする

……キャラブレエ

あと、私は基本2500字を目安にしていたはずだが最近どうした

従兄妹

「さて、今日はフィンレイの娘の――」

「リースです」

初めに口を開いた方が私の名前で詰まったので、直ぐに父様が横から知らせる。

「――リースに会うのは皆初めてだと思うので、簡単に自己紹介をしようと思う。」

リースはその言葉の通り他の親族に会うのは初めてなので、こう言う事は正直助かったと思った。

自己紹介というものは、その人の性格などを知るのにも役立つものである。

「では、私から始めるとしよう。」

私の名前は私の名前はヴァイオスだ。

レグ「おほん！」――フィンレイの父でリースの祖父になるな」

初めはこの場を取り仕切っていた方で、私のお祖父様らしい。

それよりも父様先ほどの咳払いは何ですか。

「次は私の番か」

いい終わって一泊おいてからお爺様、ヴァイオスが左に座る方へ視線を向ける。

先ほどアレン神父と言い争っていた方だ。

「私はアリストだ、フィンレイの兄でリースの叔父だ。よろしく頼む」

なるほど、叔父さんですか。

「次は私ね」

次はそのまま時計回りにいく様だ。

多分アリスト叔父さんの妻だと思われる方が始める。

「私の名前はアネモス、隣のアリストの妻です。よろしくねリースちゃん」

予想は当たっていたようだ、ということは叔母さんにあたるわけですね。

まあ、どちらかという叔母さんというよりは、お姉さんみたいな人ですけど。

「次は俺の番かな」

このまま時計回りに行くとしたら次は多分先の二人の息子だと思われるこの人だろう。

見たところ年は十七、八と言ったところか。

父親譲りの綺麗な金髪の人です。

最初の印象としては静で落ち着いた感じの人だったので一人称が“俺”と言っのには少し意外でした。

「アリストの息子のアーセファです。友人とかにはセファとか呼ばれてる、よろしくリース」

アーセファ……強風ね、まあアネモスさんが風ならそう不思議ではないか。

人が名前で決まるわけでもないし。

友人とかってことは私もセファさんって呼んだほうがいいのか？

（これで一応全員の名前や関係もわかったし、親族会とかも進めるのかな？）

「さて、これで「待った」……アレンか」

お祖父様が話を進めようとしたのを遮ったのはアレン神父だった。

「一応私のフルネームを覚えていなかった気がするのでこの場を借りてと思つてな。

構わないか？」

（そういえば私はアレン神父って一度もフルネームで名乗ったところ見たことなかったな）

私は一応一度見聞きしたことは忘れないので少なくとも私のいるところでは名乗っていないはずだ。

私が過去の記憶を思い出していると、不意に視線に気づく。

（……アレン神父？）

視線の主はアレン神父だった。

その視線はいつものような優しいげなものではなくて、観察するような、見透かすような視線。

しかし、それも一秒にも満たなかったので、スルーすることにする

る。

「では、待たせても悪いので手短に、私のフルネームはアレン・フエガリスです。

覚えておいてくださいね」

「はい、記憶力には自信がありますから」

一応そう返すとアレン神父は満足げに頷いて『終わりました』というようにお爺様のほうへ視線を向ける。

そうしてようやく親族会とやらが始まるようだ。

さて、親族会と言うのは簡単に言えば食事を交えての近況報告（十年を近況とは……人間にしてみれば長い年月だが吸血鬼にしてはほんの僅かな時間らしい）や今後の事。

後は談笑などといった感じだ。 実際、親族の顔合わせや談笑のほうメインかもしれない。

「さて、ちょうどヴァイオスやアリストも居ることですし、少し話があります」

食事も終わり、談笑も一段落したところで、唐突にアレン神父から話が切り出される。

「いえ、そんな大した話でもないですよ、ただそろそろリースちゃんを学園に入れようと言う話です」

「……」

だれも何も話さない重苦しい沈黙。

先ほどのまでの雰囲気が一八〇°変わっていた。

「ふむ……リース、アーセファ子供同士で話したい事も有るだろう」

……いえ、特に無いです。

本音はこうだったが、有無を言わせない雰囲気だったのでセファさんと共に席を立ち、大広間から出て行こうとする。

（あとは大人の事情でことね）

少し前に行くセファさんが扉に手を掛けた時。

「待て」

何故か呼び止められた。

私には身に覚えが無いのでセファさんを見ると、まるで悪戯がばれた時の様な顔をしていた。

「机の裏側か、確かにバレにくいがまだまだ隠蔽が未熟だな」

（机の裏側？）

エレニウスの魔力を見る能力を発動させて机を見ると、微妙に魔力の流れがおかしかった。

（あれは盗聴の魔方阵。 あそこまで小さく出来るもののなの？ その上魔方阵自体に隠蔽を細工して有る。 あのサイズでこれだけのものを……なんて技術。

そして、それに気づいたお祖父様）

私もかなり魔力感知が高い方だと思ってたけど全く気づかなかった。

まったくこの一族は化物ばかりね。

――

とりあえず、庭へ来ました。

最後はかなり重い空気だったので少し開放的な所へ行きたいという理由です。

「しかし、学園へ行くとは……驚いたな」

突然、今まで無言でついて来たセファさんが話しかけて来ました。

「そんなに驚く事ですか？」

「うん、だってあそこは魔窟と呼ばれてるくらいだし」

「魔窟って……」

少し大げさ過ぎると思い苦笑を漏らすと、セファさんはそれにと

話を続けた。

「本来はあそこに入るのは12歳以上だし」

「……え」

その瞬間、私の表情が凍り付いた。

（……12歳以上？ 私聞いてませんよね？）

「まあ、がんばってね」

そんな私の困惑を知ってか知らずか、なんか無責任な励ましを受
けました。

「言い忘れてたけど俺も学園の生徒だからよろしくね」

……は？

え？ 今このタイミングで言いますか？

ま、まあいいでしょう、そうならそれで色々と聞きたい事もあり
ますし。

「聞いてもいいですか？」

「どうぞ」

即答だった、まるで予想していた様な。

少しジト目で見ると、笑顔が帰ってきました。

「セファさんは学園へ行って強くなりましたか？」

「……どうかな、色々と学んだし経験もしたけど強くなったかはわからないな」

「わからない？」

「うん、わからない。」

それに、まだ強さとは何かもわかってないしね」

だけど、とセファさんは更に続ける。

「出来る事は増えたかな。」

例えば、ちよと真似してくれるかな」

そう言つて魔力の量を調節して、《ウインドショット》の基本術式を私が真似しやすい様に大きくゆつくりと描いていきます。

私もエレニウスを発動して、術式や魔力量など、完全に同じモノを作りました。

「それじゃ、同時に発動させてね」

私が頷くと、一拍してから術式に魔力を流していく。

(……まったく同じモノを作ったのだからお互いの魔術は相殺されるはずよね。……え？ いま術式がブレなかった？)

しかし、術式に異常があれば当然魔術は発動しないので、リースは自分の見間違いとすることにした。

そして、ほぼ同時に魔術が発動してお互いに向けて真っ直ぐに進んでいく。

そして、二つの魔術がぶつかった時にリースは驚きの声を上げた
アーセファの風弾がリースの風弾をかき消して、そのままの勢いで飛び続けるのを見たからである。

「……ッ」

リースは少し混乱しつつも、迫る風弾に対して腕を横に勢い良く振り抜き、風弾を霧散させる。

本来なら避けるべきだったが、未知の力を示した魔術が迫るとい
う状況がリースの思考から余裕を無くした結果、術式の核にあたる
部分を破壊するという事をした。

そして、それを見たアーセファは少し驚き、指を口元へ当て、考
え込む様な仕草をした。

「へえ、二人とも面白いことしてるね」

唐突に屋敷の方から声がした。

リースと考え事を中断したアーセファが声がした方を見ると、エ
リスとアネモスが並んで歩いて来るのが見えた。

「アーセファ君、今のつてもしかして《暴走魔術》^{オーバーロード}？」

「そうですね、よくわかりましたね」

その言葉を自分を下に見ていると取ったのか。

「あら？ 魔術で私に敵うものはそうは居ないって前に言わなかつ
た？」

エリスがにこやかにいうが、目が笑っていないことにアーセファも気づいたのだろう。

「確かに聞いた覚えはありますが、魔術戦でという意味だと思ってましたよ」

若干たじろぎながらも、なんとか弁明？　する。
声が少し震えているのは寒さのせいだと言っておこう。

「私はアーセファの暴走魔術よりもリースちゃんのほうに興味があるな」

そこで、自らの息子に助け舟を出すかの様にアネモスが話題をそらす。

暑くもないのに頬に汗が見えるのは多分見間違いである。

「リースちゃん、さっき何やったの」

（……ここで本当の事を話すべきじゃないかな）

「えっと、ただ手を強化して風弾を斬っただけですよ？」

その瞬間アネモスとアーセファは目を少し細めたがリースが気付く前には元に戻っていた。

「そっいえば母様、どうしてここに？」

「ん？　大人の話は終わったからね、アネモスと抜け出してきちゃった」

リースは夫を放ってきていいのかと思ったが、そう思った瞬間エリスに笑顔を向けられたので口にはしなかった。

今この場において、母エリスは『さいきょう』だった。

「さて、リースそろそろ部屋へ戻って寝なさい。アーセファ君もね」

「……はい、おやすみなさい母様」

リースは素直に部屋へ戻ろうとしたが、アーセファは少し不満そうにしていたが、エリスの笑顔であっさり引き下がった。

（どうでもいいけど、泊まりなのね、どこで寝るんだろう）

「お帰りなさいませ」

リースたちが屋敷に戻ると、アニスが待っていた。

「アーセファ様、寝室へ案内します」

そういつてアニスはリースとアーセファを引き連れて三階へいき、廊下を進んで行く。

「今日はアーセファ様にはこちらの部屋でおやすみになられて下さい。
では、私はこれで」

アニスは口早にそう言つて有無を言わずに去つて行く。

「……この部屋つて、私の部屋なんですけど!？」

「……え？」

私が急に大声を出したことで今まさに扉を開けようとしたセファさんが硬直しました。

(アニス……いや、母様の差し金か)

以前から考えが読めない人だったが、今回は本気で何を考えているのかわからなかった。

「あー、ちょっとさっきのメイド探してくるよ」

「……いえ、いいです。中へどうぞ」

私は先に部屋に入り、扉の前で硬直しているセファさんを部屋へ招きます。

セファさんも少し気まずそうにしながらも部屋に入って来ました。

「寝る前に少しいいですか？」

ふと、私はさっきの出来事から、セファさんに聞きたいことがあ

るのを思い出しました。

「暴走魔術のことかな」

「はい」

「俺もそんなに詳しく知ってる訳じゃなくて、学園の友人から教えてもらったものなんだ。

だから、多分リースの知りたいことには答えられないと思うな」

「そうですか……」

「その代わり、リースが学園にきたらその友人を紹介するよ」

「あ、ありがとうございます」

「じゃあ、もう寝ようか」

「そうですね……あ」

リースは寝るためにベッドへ歩み寄ったがその時に一つ無視できない重大な問題に気づいた。

そう、この部屋にはベッドは一つしかないのだ。

リースはアーセファを見ると、アーセファもその問題に気づいた様だった。

「……あー、その、俺は床で寝るから」

「……ベッドを少し分けてあげます。

さすがに人を床に寝かせて自分だけベッドというのは、その、気になって眠れませんからね」

リースは若干赤く染まった顔を隠すように後ろを向き、髪を結んでいた黒いリボンを解いてベッドへ潜り込んだ。

そして、いつまでも某然としているアーセファを見て。

「早くしなさい！ それと枕は私が使いますからね」

放心していたアーセファはリースに怒られてしびしびというか恐る恐るといった様子で、リースのベッドへ入って行った。

余談だが、リースは疲れてすぐに寝たが、アーセファはなかなか眠れなかったという。

理由はお察し下さい。

従兄妹（後書き）

さて、アーセファアア今すぐその場所を変わりやが（殴

……すみません調子乗りました。マジすみません、このとおりです、だから暴走魔術だけはご勘弁を

さて、今日が実質夏休み最終日で宿題が九割くらい残ってるので死んできます。

プレゼント（前書き）

サブタイが思い浮かばない。

今回は三人称風味にしてみました・・・よね？（自信ない）
一人称の方がかきやすい・・・か？

しかし……文才ほしい

頭の中では思い浮かぶけど、文に起こすとなかなか表現できない。

プレゼント

——午前六時、それはなるべく規則正しい生活を心がけるアーセファがいつも起床する時間だった。

そして今日もいつものように六時ちょうどにアーセファは目を覚ました。

「ここは……そうかリースの部屋だったな」

見慣れない天井を認識した瞬間に、自分の体内の異常確認、体内に毒物など有害なものがないかを調べる。それから寝る直前の事を思い出す。そうして昨日はリースの母——エリスに嵌められて？　リースの部屋で寝たことを思い出した。

「とりあえず起きる……か？」

少し暑いと感じたことと、顔を洗って重たい意識をはつきりさせようとするために体を起こそうとしたところでアーセファは自分の体の異変に気がついた。

「……体が動かない」

そう、アーセファが体を動かそうとしても何か強力な力に押さえつけられているかのように、まったく体——正確には膝から上——が動かないのだ。

先ほど体内の確認をした時には何の異常もなかったので、外的要因によるものと判断したアーセファは、状況を確認するために布

団をベッドの上から蹴飛ばすと、なぜ体が動かなかったのかを理解した。

アーセファはリースに抱き付かれていたのだ。

いや、正確にはホールドされていたというのが正しいか。

この小さな体のどこにそんな力があるのかといたいたくらしいの恐ろしい力で、リースはアーセファの四肢を締め付けていた。

そして、先ほどアーセファが布団を蹴飛ばして少々肌寒くなったのか、更にギリギリと締め付ける力を強くしている。

しかし、今この状況においてそのようなことは些細なことだった。

「なんて力だ……っと、それよりも早くこの状況を何とかしなければ……死ぬ」

主にフィンレイさんによって、と心の中で付け足しつつ、さながら時限式の爆弾処理をしているかのような心境でリースを引き剥がす方法について考える。

……が、なにも思いつかなかった。力を限界まで上げればなんとか引き剥がすことができるだろうが、少々（自分が）危険なので実行に移すことができなかった。

結局、リースの生活習慣をまったく知らないの、いつリースが目覚めますのか、あるいは、メイドが起こしてくるのではないかと、ただ精神をすり減らしながら待つしかないと覚悟をきめた。

——午前八時

それは、教会での授業がない日のリースが普段目を覚ます時間だった。

授業がある日はいつも七時にアニスが起こしにくるが、今日は授業がない日なので、なんの邪魔もなく八時まで眠ることができた。

「……朝か」

「朝だね、おはようリース」

「ん？……」

胸元より少し上までかぶせられていた布団を折り返して寝起きがとても悪いリースが不機嫌そうな口調でつぶやくと、ベットから少し離れた位置から声が聞こえてきた。

一瞬怪訝そうな顔をして声がしたほうを見ると、リースの部屋にある少し小さめの椅子にアーセファが腰掛けていた。

アーセファの姿を見たリースは驚きと寝起きの姿を見られた恥ずかしさから完全に目を覚まし、同時に昨日の出来事を思い出した。

「……おはようございます、朝早いんですね」

「そうだね、でも他に合わせているとすぐに慣れるよ」

吸血鬼にしてはという言葉を抜かしたけれど、アーセファには意味が通じたようだった。

しかし、それで会話は途切れ、続く話題もないので、二人の間には無言の空気しかなかった。

しかしさすがは年長者というべきか、こういう場合の対処法は心得ていた。

アーセファはこの空気を感じ取り、自分の手の中に解決の手がないと見るや、速やかに逃げをとった。

「それじゃあ俺は少し散歩でもしてくるから」

そういい残して、アーセファは部屋を出て行った。

「……とりあえず、着替えようか」

特に何もすることもなく、一人になったこともあるのでとりあえず着替えることにした。

「……………、さてなにを着よう」

クローゼットへ向かう途中に、数秒だけ部屋の隅にある鍵付の箱を見たが、何もせずにクローゼットの前へ移動し、服を漁り始めた。

「これでいいかな」

リースが選んだのは、水色のワンピースだった。

今はまだ三月にあたり、まだ少し肌寒い日が続いていたが、昨日から暖かくなってきたので、軽めの服装にした。

「今は……八時半過ぎか。もうすぐ朝食の時間ね」

時刻を確認したリースは少し早いかなと思いつつも昨日と同じ大広間へ行くことにした。

リースが朝食の席に着いた時、昨日のうちに帰ったらしいアレ

神父を除いた大人達は既に席に着いていたが、まだアーセファは大広間にはいなかった。

しかし九時少し前に現れて、それを確認して朝食をとった。

朝食の最中は、昨日と同じように適当に雑談といったようだったが、リースは昨日のうちに少し距離が縮まったアーセファと話していた。

話といっても主に学園や魔術についてアーセファに質問するといった感じだったが。

そして、朝食も終わり、大人たちの雑談も一通り終わった十時ごろ。

「……さて、そろそろ行くとするか」

と、唐突にヴァイオスがフィンレイに言った。

「なんだ、もう帰るのか？」

「最近は少し忙しくてな。なに、今度は五年以内には来るさ」

「……以外に早いな、忙しいんじゃないのかよ」

「孫に会うのにそんなこと言ってられんわ。というか今度はお前が来い」

「あゝ、そのうちにな」

「アリストもまたな」

「ああ、今度は来れんかもしれんがな」

「お前も忙しいのかよ」

「お前は暇そうだな。少しは弟らしく兄を手伝ったらどうだ」

「無理無理、俺、お前が出来ることは出来ないから」

「……そうだったな」

などといったやり取りが行われていた。

エリスとアネモスの二人はいつの間に移動したのか、姿が見えなかった。

リースはというと、アーセファと短い別れの挨拶を交わしていた。

「それじゃあセファさん、短い間だったけど楽しかったです」

「俺も楽しかったよ、まあまたすぐに会えるだろうけどね」

「そうですね」

「——っと、そうだと忘れるところだった」

「え？」

「ホントは昨日渡すはずだったけど忘れてた。はい、プレゼント」

そういつてアーセファはポケットから小さな包みを取り出して、リースに手渡した。

「……ありがとうございます。開けても？」

「どうぞ」

「……髪飾り？」

開けると中には蝙蝠の形をした髪飾りが入っていた。

しばらく手の中のそれを見ていると、ふと視線を感じた。

アーセファを見上げると、微かな期待を含んだような視線だと気づいた。

プレゼントを貰った手前、そのような目で見られては身に着ける以外の選択肢をとる以外になかった。

「……えっと、似合います？」

「へえ、リースを見たことなかったから少し心配だったけど、不要な心配だったみたいだね。うん、かわいいよ」

「……ありがとうございます」

何に対してのお礼かはリースは言わなかったが、アーセファはそのことに気づいてなのか微かに微笑むだけだった。

「アーセファ、行くぞ」

「はいはい。じゃあね」

短くそう言っただけでアーセファはアリスト、ヴァイオスと共に大広間を出て行った。

入れ違いにエリスが入ってくるところを見ると、アネモスとは外で合流したようだ。

「やれやれ、いつも急に連絡してきてすぐに来るから準備が大変なんだよな」

そう聞こえるはずのない文句を言うフィンレイは、どこか楽しそうだった。

プレゼント（後書き）

これで、学園組の登場人物を出せば大体のキャラクターの登場と配置がすむかな。

あと、これはアンケートに当たるのかも知れませんが、アニメやゲームの技や魔法ってどれくらいなら入れても大丈夫でしょうか？

せっかく前世の記憶でそういうのも知ってるんだし使わないと損かなと思のですが。

出発 三日前（前書き）

……駄文でごめんなさい

出発 三日前

「えっ、リースも出てくのか？」

「まあ、なんとなくこうなるんじゃないかと思ってたけど……」

セファさん達が帰っていた後、私はアッシュとリアに自分もこの町を出て行くと決めたことを話した。

リアはなぜか予想していたみたいだったけど、アッシュは驚いていた。

リアはともかく、アッシュの反応は昨日の今日でこれだから驚くのも無理は無いと思う。

「で、とりあえずここを出て行くことはわかったけど、どこに行くんだ？」

「えっと、みんなは『学園』って言ってたけど、そういえばちゃんとした名前は聞いてなかったわね」

「……学園？　なあリア、どう思う？」

私が学園と言ったらアッシュは少し考えるような素振りをしてからリアに振った。

なんだろうその反応、すごく嫌な予感がする。

「うーん、まあ、アレン神父や領主様達が絡んでるなら何も心配は無いだろうけど……時間的に無理があるような気が、いや……」

後半のほうは殆ど独り言に近く、何を言っているのか聞き取れなかったが、ただ一言、『あまり旅路に期待しないほうがいい』

とだけ言われた。

正直、生まれて初めてこの町以外の風景を見ることになるから期待するなという方が無理だと思ったけど、この二人の目がなんだかすごく哀れなものを見るようだったからとりあえず『わかった』とだけ返しておいた。

いったい、何があるというのだろう。

その後、いつもどおりアッシュをからかったりしていたが、アッシュの「そういえばその髪飾りどうしたんだ？」という思わぬ反撃のため攻守が逆転し、散々リアに聞かれまくった。今更だけどリアにはまったく被害がないのはどういうこと？
アッシュには隙を突いて思いつきり（八つ当たりで）脛を蹴って密かな反撃をしたのはどうでもいいことである。

「そういえば、アッシュとリアは一人旅なの？」

そういえば、一人旅なのか、一家そろって引越しするのか聞いてなかったからこの機会に聞いておくことにする。

「そうだな」「そうね」

まあ、予想通りね。

「あ、そうだリースはいつ出発するんだ？」

あ、話して無かったわね。

「たしか三日後だっけ」

「それじゃ、俺達より少し早いのか」

「アッシュたちはいつ？」

「俺とリアは来週の初めだな」

……二人そろって出発か、このリア充め。もう貴方達付き合いなさいよ。

と、少し前も似たようなこと言った覚えがあるから声には出さないでおく。

でも、あと三日でこの二人や両親たちと暫くのお別れか……

街の南区、大通りから少し外れた場所にある教会の上で一人の男が屋根の上で横になっていた。その男はこの教会の主と言える人物で、いつもならあまりの忙しさからこのような場所で横になっている様なことは無いのだが――。

……やることが無い。

それが私の今日という一日になりそうです。学校もないし、いつもほんの少しの余裕ができたときにかつての教え子を弄って休息を取っているのだが、アネット君は何処かへ出かけてしまっているでそれもできない。

つまり何が言いたいかというと。

「……はあ、暇だ」

私は普段こういった愚痴を漏らすことは無いのですが、今日は本当にやる事が無い。

こんなときは――

「――アッシュにリア、そしてリースですがフィンレイ、貴方はどう思います？」

私は今教会の屋根に一人腰掛けているのですが、先ほどフィンレイが姿を隠して近くに来たことに気づいたので少し暇つぶしに付き合ってもらうことにしました。

「なんだよアレン、気づいてたなら早く言えっつての。で、思うっつてのは？」

先ほどまでは文字通り影も形も無かったところから黒いコートを着た白髪の男が姿を現した。

まったく、もうすぐ春だというのにコートとは、暑くはないのだろうか。それと貴様、十字架にもたれるな、穢れるだろうが。

「そうですね、それでは三人の中で誰が最初に貴方に本気を出させると思います？」

「出させるだけならリアが最初だろうな。　まともにやり合えるようになるのはアッシュってところか」

少し考えるかと予想していたが、フィンレイは予想に反して即答した。

「なるほど、理由は？」

「まずリアは種族柄スピードだけは相当なもんだ、最終的にヴィテ

スに迫るところまで伸びる素質はあると見た。 成長も速いしな」
「そうですね、親があれですからね。 やれ恐ろしいことです」

私達は見た目軽く言ってますが、割と本気でリアならそれくらいは行くだらうと思っています。 まあ、それでも潰す方法は幾らでもあります。 広域多重拘束とか、殲滅術式とか。

「次にアッシュだが、あいつは馬鹿だが、こと戦闘に限っては何気に天才なんだよな、それにあの刀の戦技、あれを極めれば超近距離戦なら相当のとこまでいけるだらう。 魔法は補助以外は壊滅的だらうが」

「そうですね、まああの家系に魔術の才を求めるほうが間違ってますから。 しかし、彼が行くのは第六大陸。 意外と雷神あたりを味方につけてもおかしくはありませんね」

実際、先天的に魔術の才が無い者が魔術に近いものを行使する際に神の力を借りるのは珍しくないことですが、彼の場合は……ね。

「で、最後にリースだが……わからん」

「というところ、よもやここで親バカ発揮とかいったら無事に帰れると思っていないでしょうね？」

「おいこら、殺気を纏うな！ 壊れるだらうが（教会が）」

……すこし殺気を出しただけでまさか屋根にひびが入るとは……建て替えの時期も近いですかね？（あつもちろん費用はすべてフインレイ持ちで）

「で、リースのことだったか、俺が言うのもなんだけど異常なんだよな。 わかりやすいもので言えば、あの体術だ、初めて見たのは

五歳の時なんだが、不意打ちでくらってな、衝撃を内側に透徹させる技なんだが、あの環境で形だけとは言えあれができるのは明らかにおかしい」

「ふむ、アッシュと同じく戦闘に関して何かしらのものがあるのでは？」

「……お前、わざとだろ。」

「と、いいますと？」

「防御や足運びなら駆け出し冒険者くらいの技量だが、攻撃に関してのみ全ての動作に本来の威力を出させないようにしている動きが含まれてやがる。しかも本人はそれに気づいてねえし」

「よく気づきましたね。私は貴方がリースが授業している所を見せたことは無かったはずですが……もしやストーク」

「黙れよ。遠見だつての」

「……まさか近くで見つかるリスクを無くす為に覗きにはしるといいかげんにしろ」

「……ふむ、まあ弄るのはこの辺にしてそろそろ真面目にいきますか」

「……最初からそうしてくれ」

フィンレイは心底うんざりした様子でいいますが、私の答えはN Oと決まっています。

これは暇つぶしなのですから。

まあこれ以上ふざけるともう帰りそうですからそろそろ情報^{エサ}でも与えますか。

「先ほどの体術や生まれ持った魔力の量だけならまだ天才で済むのですがね……」

「あ？ それはどういう……」

なるほど、いくら除き魔といえども常に見ているわけではないと……まあ、あの仕事量ですからね。

結局、彼女の特異性を知っているのは今のところ私とエレオノーラだけ……か？

……術式、構成式、アナライズの解析に解析した魔術を行使するフェイク・マジック模倣魔術になぜか使えるオリジナルに近い呪縛の邪眼か、他にもありそうだが、共通点は『視る』ことか。少し注意してみていれば十分気づくことができるでしょう。

「そこから先は自分で考えてください。　といか、別に少し天才な子供でよくないですか？」

そのほうが扱いとか楽ですし。私達も、彼女にもね。

「ちっ、わかったよ。　それとリースの出発は三日後くらいと考える」

……三日後ですか、少し急ぎの用が増えましたね。

出発 三日前（後書き）

はい、サブタイ適当でごめんなさい。今回は本当に思いつかなかっただんです。

しかし、僕の更新ペースも月一か試験前で安定してきましたね。まさかとは思いますがお待ちしている方が居りましたらすみません。

だって感想とか全然こないんですもの。と、少しばかり愚痴らせていただきましたすみません。

今回の話、勢いだけで書いた感が否めないなので、誤字脱字、前後の文の繋がりがおかしい、そもそも根本の部分が矛盾しているなどあるかもしれません。もし発見してしまいましたら、罵声と共に叩きつけて下さい（僕はMではありません）

しかし今回の話、最初に考えていたのと全然違う。これも全て数学の授業中に思いついたのがいけないだ！おかげでそのときのノートはほぼ真っ白だよ！

エレニウスの枷（前書き）

あははは、今日から期末テストだったのに何をやってるんでしょ
うね。

前回更新の間隔からお察しの方もいらっしやるかも知れませんが、
今回はテスト期間中の執筆プラス勢いだけということもあって、か
なりの手抜き——低クオリティとも言う——や誤字脱字、さらには
前後の矛盾が予想されます。正直無くてもいい話じゃないかと自
分でも思っているくらいです。飛ばしてもよろしいかも？

そして安心のタイトルが思いつかない病

エレニウスの枷

「——んう……ん？」

いつもと同じように自然に目が覚めたが、視界に写るのはいつもの見慣れた天井ではなく、空というには余りにも色がなく白色で、視線を真上から横にずらして見てもやはり白色だった。

「ここは……どこだっけ。まあどこでもいいか」

最近このこと似たような場所に来たような覚えはあるが、まだあまり意識が覚醒していないことと、自分に危害が及びそうにないことを確認すると、もう一度意識を眠りの中へ沈めようとした。

「ちょ、ちよつと待った！」

本当に眠りに落ちようになったとき、横から焦った様な声が響いた。

そのせいで、再び意識がまどろみから現実へ戻ってきた。これ以上うるさくされてはかなわないので目を開けて声のするほうを見ると、案の定というべきか、そこには先日この白く何も無い空間で出会った両目を閉ざした青年の姿をしたモノがいた。

今回はあの黒いのは居ないのか。あっちのは結構気に入ってたんだけどな。

「……ああ、また貴方が。　おはよう、そしておやすみ」

私だつていかに寝たくても声をかけられたのに無視して寝るほど落ちぶれてはいない。

だからちゃんと相手の目を見て、挨拶して、それから眠るのだ、これなら誰にも文句は言わせない。

「ちよつ！　マジで待つて、寝ないで！　話を聞いて！」

……五月蠅い。

まったく、人が寝てるときは静かにしろと習わなかったんでしょ
うか。

「いったいなんなんですか五月蠅いですね」

「君つて、絶対寝起きは本音が……不機嫌だよ。　とにかく、さ
つさと覚醒してもらおう」

そういつた途端に、この空間の温度が一気に下がった。　多分零
度は超えたと思う。

急激な温度の低下によって私の意識は完全に覚醒し……なかった。

「……あれ？　おかしいな、普通ならこれで目が覚めるはずなのに。
あつ、そうか君一応魔氷狼でもあつたね」

それなら言い、今度は温度を上げていく。

これには私も飛び起きるしかない。　魔氷狼は、字からもわかる
と思うが、寒さには割りと強いのだ、逆に暑さに強いのかと聞かれ
れば……どうなのだろう。

実のところ私も知らなかったりする。　私の暮らしてた環境は基
本的に気温が低く、夏に当たる季節も快適な気温だったので知る機

会が無かったのだ。

「…………ッ！ 暑い！」

「あ、起きた。 おはよう」

青年は起きたらすぐに気温（あるいは室温）を元に戻した。

その顔は、目を閉じているので正確にはわからないけど、なんとなく楽しんでいるような、勝ち誇ったような雰囲気がある。

わかりやすく言うと、とても殴りたくなるような顔と言っておこう。

「で、一体何のようですか」

「いや、たいしたことじゃ……………って待って、殴らないで！」

会ってまだ二回目ですけどなんとなくこの人の扱い方がわかってきた様な気がします。

「僕にとっては大した事じゃないけど、君にとっては大したことだから！ だからその拳を収めて！」

私にとっての大事なことですか、とりあえず話が終わるまでは我慢しましょう。

「まったく、君なんか最初と全然態度違うじゃない？ 前はもっと柔らかかった気がするんだけど？」

「ここでは誰も見てませんし、わざわざ神経使う必要もないでしょ、それに貴方も前は一人称は俺でしたよね？」

「うわ、よく見てるな。 別に僕の一人称は不定だからそのときの気分が変わるんだよ。 っとなあ本題だけど、これから先貴方は

幾つかの困難に遭うかもしれません。しかし今のままでは身体的にも能力的にも不十分です、っとこんな感じだったかな……」

「なんか真面目そうなこと言っていましたけど最後の一言で一氣に信用が落ちましたよ？」

そう言うところはスルーでと言って続けた。

「で、身体的に干渉するのはあんまりよろしくはないからせめて能力を何とかしようというわけで今回は呼んだわけね」

「はあ、割と真面目な内容だったことに驚きですけど何とかするって何をするんですか？」

「とりあえず今回はその眼の事」

そういつて私の目をピシッと指差して続けた。

「その眼は適当に作ったとはいえ神ローベルジーンの製作物の中のひとつであり。

その能力はそっちの世界のクラスSSつまり超希少固有能力にも引けをとらない筈なんだよ。でも今まで君が使ってきた能力は、術式、構成式の解析と模倣、視認した技術の解析と模倣、それと呪縛の邪眼、と動体視力などのデフォルトのものを除くとこれくらいしかないね」

「まあ、そうですね」

確かに今までを振り返ってみるとこれくらいしか使ったことありませんね。

単に使い方がわからないということもありますけど、自分がこういった力を持っているのを知られたくないというのも理由の一端ですね。

技術の模倣等にしても、わざとその精度を落としたりして少し賢

い程度にしかしてませんしこの程度がまだ特別と天才の分かれ目かな、というところで止まっているつもりです。

「先ほどの解析だけでもまだ色々と使い方があるんだよ。例えば、物質の解析や他人の力量を数値化して見えたり、今どいう状態なのかとかね。

で、これから君の眼、エレニウスに科せられた枷を少し外す」

「あ、やっぱりそういうリミッターとかあるんですね」

「うん、ゲームみたいにレベルが上がったら外していこうと思ってる。

今回は初回だから説明するために呼んだんだけどね」

「……ずいぶんと長い説明ですね」

「そこはまあ、僕だし？ 見逃して。

——じゃあ、外すよ」

そう言う青年の声は、今までみたいにふざけた感じではなく少しトーンを落とした真面目に聞こえるような声でした。

いつも、こうやって話せばいいのに、割とイケメンボイスだからもてるかもよ。

「……………」

「——はい、終わり」

今度はさっきの真面目な声ではなくて、いつもの前向きに表現するなら明るい声に変わっていました。

「あの、なにも変わったように見えないんですけど？」

「それはそうだよ、ここには魔力というものが無いからね。

さてと、面倒だけど説明するか。それが終わったらやっと帰れるよ、よかったね」

「……早く説明してもらえませんか？ 早く帰りたいものなので」
「はいはい、じゃよく聞いてね——」

「——んう……ん？」

目が覚めたら今度こそ見慣れた天井だった。

「やっと、帰って……ッ！」

やっとあの空間から帰ってきたことを確かめるようにつぶやこうとした途端、私の眼に鋭い痛みが走った。

痛、こんなことになるなんて一言も言わなかったのに。

しばらくすると少しずつではあるが、痛みも薄れていった。薄れただけで痛いものは痛い。

目が開けるようになるまで目を閉じて手で押さえていたが、数分後にやっと目が開けるようになった。

「今度あったら絶対に殴ってやる………ああ、これが言ってた」

目を開くと、私の見る世界は一晩前とは激変していた。

エレニウスの枷（後書き）

最近とあるサイトを見て思ったんですが、僕の作品、圧倒的に描写がすくねえ！

まず世界観からして説明が一切入ってないということなの！？そしてキャラ！ まずキャラの外見を殆ど描いてないことに今になって気づいた！ これがまさにどうということ！

原因はたぶん、話自体や展開ばかりに気をとられたことですかね？

でも、まだ挽回の余地はある、いざとなったら書き直しという手もあるし、これから行くところは「学園」つまり学びの園！これから授業ということで少しずつ出していけばまだいい・・・ですよね？

だれかアドバイスを！ なにとぞ！

訓練・・・？（前書き）

多分、今年最後の更新だろうな。

まだ冬休みきてないし学校疲れるから。

あ、最後にちょっと重要というか伝えたいことが。

訓練・・・？

今、私の視界の八割近くを占めているものは、赤青緑といった様々な色の光だった。

先ほどの説明の中に『魔力が完全に視認できる』とかいうのがあった気がしたので、きっとこれは空气中に漂う魔力そのものなのだろう。

……それにしても、量が多いわね。これじゃ前が見えないじゃない。

さすがに視界の八割も塞がれているとなるとその向こうに何があるのかがわからなくなり、眩しくはないがかなり近くで光っているので目が疲れないか心配になった。

「日常生活で使う場面は滅多になさそうな能力ね、これって調節とか……できた」

なんとなく「この光少なくならないかな」と思ったらだいぶ量が減った。

そして、消えると思ったたら完全に消え、いつもの見慣れた天井が目に入ってきた。

「……聞いた分には便利だと思ったやつもあったけど、これは実際に使ってみると案外使えないものもありそうね。と、そろそろ起きますか」

そういつて体を起こし、手を組んで軽く伸びをする。
そしていつものようにクローゼットを開く。

「少し、数が減ったかな」

そこには少なすぎでもなく多すぎでもない数の衣類が収められていたが、ところどころに不自然な空間があいていた。元々そこにあった服は今荷造り中の鞆の中に入っている。

その中から緑色のものを選び、その場で着替える。脱いだものは畳んで机に置いておけば、あとで誰かが回収してくれる。

朝食にはまだ早い気がするし、何かして時間を潰そうかと思ったところで、不意に部屋の隅に置かれた箱に目がついた。

「これも、持って行ったほうがいいかな」

そういつて、箱を部屋の隅から机の上へと移動させる。
箱には鍵がかかっているが、鍵穴が付いている部分に指先に魔力を込めて触れると、カチチと音がして鍵が外れた。

この箱は鍵穴が付いているが、物質的な鍵は存在しない。
記憶された魔力に反応して鍵が外れる仕組みで、閉じられると自動的に鍵がかかるオートロック式の割と高価なものらしいけど、町の商工会の細工師のおじいさんに貰った。そのおじいさんによると自作らしい、最近趣味でカラクリに手を伸ばしたと言っていたが……趣味でこれだけの物を造るとは、さすが長年細工師をやっているだけのことはある。

「さて、これを空けるのは久しぶりだ」

箱を開けると中にはいくつかのカードと手帳のような形をしたカードホルダーが入っていた。

カードとホルダーには少し複雑な幾何学的な図形、つまり魔方陣が描かれていたがこの魔方陣、実はまともな魔術師が見たら暴発を恐れて速攻逃げ出すくらい出鱈目なものが書かれている。当然だろう、なぜなら私が適当に円や線を引いただけのモノなのだから。

しかし、この魔方陣は暴発の危険もなければ、キチンとした魔法が発動することもわかっている。カードに描かれている魔方陣は『収納』一定の質量までの物体に限りこの魔方陣で別次元への道を開きその中に収納すると言うものだ。

この魔法ができたのはまったくの偶然だった。

通常魔術師が魔方陣を用いた魔法を創作するには、効果を考え、それに似た別の魔術から類似点を抜き出したり、工夫したり纏めたりと色々したものを実験して効果を確かめ、また改良していくのだが、私には神の眼エレニウスの眼があるので、描いた魔法陣を見るだけでその効果が分かる。

つまり、適当に円や線を描いたものを他の人は何が起こるかわからないのでとても実験なんてできないが、私は見るだけで実験と言う工程を済ませることができる。

そういうわけで私はたまに適当に魔法陣を描き、見て効果を確かめては別のものを描きということをして魔法を作っている。

その果てに得たものの一つがこの『収納』である。

この魔法陣は授業や本で学んだルールとは大きく離れているので、使えるのは今のところ私だけかもしれない。

試しに使ってみたところ、大変目立った、というか見た目が異様

なモノだった。

これを使えることがバレたら面倒になりそうなので改良を重ねて空間系の圧縮に近い感じにすることができた。

代償として収納に制限が設けられてしまったが、在ると無いとでは大幅に違うので今はこれで満足している。

このカードと一緒に箱に入っていた表紙にホルダーに入れて、それをポケットに入れた。

「さて、次は――」

そういいかけて、廊下側から規則正しい足音が聞こえてきた。

「――と、そろそろ朝食か」

私は空になった箱を閉じて、扉を開けた。

居間に入ると、母様はいたけれど、珍しいことに父様はいなかった。

「あれ、父様はいないの？」

「いますよ、何かの準備があるとかで今は庭にいますよ。朝食が済んだらリースも来るようにと言ってましたから、後で行ってあげなさい」

はあ、と少し煮え切らないような返事をして食卓に着き、朝食をとる。

メニューは当然のようにパンやスクランブルエッグといった洋一色、ただし野菜はない。

初めこそ見たことの無いものもありそれなりに楽しんでいたのだが、最近は和風のものが食べたくなくなってきた。そんなものはあるはずもないのだが。

朝食をとりつつ、準備って何の準備だろうと色々と考えてみたものの結局わからず終いで、どうせ後でわかることだ、と考えることを放棄し、母様と話すことにした。

話すと言いうより、外のことを教えてもらおうと言ったほうが正確か。

町に着いたらどうするかとか、困ったときの対処法などを聞かされた。

そうして一通り話し終わったところに朝食を食べ終え、席を立つ。

「それでは行ってきます」

そういつて居間を出て行こうとしたとき

「そつだ、リースちょっと待って」

母様に呼び止められた。

「はい、どうかしました？」

「その言葉遣い、直したほうがいいわね」

「え……どこか変でしたか」

正直、自分でもどこを直していいのかわからなかった。

両親の前ではなるべく丁寧な感じの言葉を使っているはずなのでこれを直せと言うことはさらに丁寧に、と言うことだろうか。

しかし、母様が言ったことは私の予想とは違う言葉だった。

「別に変じゃないけど、とりあえずその丁寧な感じをなくしなさい」

……どうということなの

「外でそんな風に話したりしたらすぐにそれなりの育ちをしたってばれて狙われる可能性が格段にあがるからね、そうねアッシュ君やリアちゃん達と話すときのがちょうどいい感じかな」

たしかに、そんなことになったら危なそうだな。

主に狙ってきた人たちが。余計な犠牲者を出さないためにも確かにこれは改めたほうが良さそうだ。

「えっと、わかりました……じゃなくて、わかった？」

なんだかとても難しく感じる。

まあ、でもそれを確認した母様は満足そうにうなずいて

「よし、じゃあ行つてらっしゃい」

と笑顔で送り出した。

庭へ出るとすぐに父様を見つけることができた。

父様のそばには、両刃の西洋剣が二本地面においてあった

「来たね、おはようリース」

近づく父様がこちらに気づいた。

「お——」

はようございます、と続けそうになったが、つい先ほど言われたことを思い出し。

笑顔で

「——おはよう、父様」

とつづけた。

それを聞いた父様は少し驚いた表情をしたけど、すぐに

「エリスに言葉を直すように言われたのかい？」

と少し崩した顔でいった。

「はい、これからのためにつて。ところで父様、なにか用？」
「ああうん、ちょっとこれ持って」

そういつて地面の剣の一振りを手渡した。

「なにこれ」

「ん？ 剣だよ」

うん剣だ。

詳しく言つと、長さ約七十cm、重量は持った感じ一八〇〇gの一般的なシングルハンドの西洋剣。

剣の色や光沢から見て多分材質は鋼だろう。長さや重さや形状から多分そうとう頑丈なように見える。

……で、だからなに？

「それじゃ、これ使つてちょっと試合しようか」

「……？ 別にいいですけど」

少し釈然としないながらも剣を構える。

「それじゃ、はじめ」

その言葉を聞いて、一気に身体を加速させ、父様の一步半前へ踏み込んだ。

そして勢いを乗せた剣を横薙ぎに振るつたとき。

「ああ、言い忘れていたけどソレ刃引きしてないから」

「！？」

その言葉を聞いたとき、反射的に腕を逆方向へ動かそうとして、その結果、剣筋が乱れた。

そして、剣と剣とがぶつかる金属音が庭に響いた。

父様がその手に持った剣を振り下ろし、私の剣を払ったのだ。そして、その反動を利用して跳ね上がり――

「……ッ」

父様の剣の切先が、私の首に触れた。

そして、私の首から赤色の細い線が一筋流れた。

その線は首筋を伝って明るい緑色の服に赤色を広げた。

「今、迷ったね」

父様は私の首から剣を引いて言った。

「……………」

心なしか、初めに手渡されたときよりも手の中の剣が重く感じる。

そして、父様が私に剣を向けると、身体が萎縮してしまうのを感じた。

この原因はわかっている。でも――

「初めて殺すための武器を持ったんだ、それは自然な反応だと思うよ。むしろ、何も感じず、いつも通りのことができる方がおかしいことだ」

でも、といって父様は続けた。

「これからは、そうも言ってられない。命を奪う機会もあるだろうし、奪われる危機に瀕すこともあるかもしれない。

その時に今のような反応を見せたら……死ぬよ」

でもまあ、と言って。

「こういうのは慣れるものじゃ無いんだけどね。むしろ慣れるほうが問題なのかな？」

どちらかと言うと覚悟の問題？」

そのとき父様がなぜ疑問系を使うのかはわからなかったけど、言いたいことはなんとなくわかる気がする。

「とは言っても、何の対策もなくその時になったら今みたいになるのはわかったし、ほんの少し準備をするくらいはいいんじゃないかな？」

「……え？」

「と言うわけで、今からやることはとりあえず殺気を流せるようになりましょう。って感じで」

「え？ ちょっと」

そう言って、父様は剣を構え直し

「じゃ、いくよ」

結局、この『訓練』は昼食をとった後にも行つことになり、夕方まで続いた。

訓練・・・？（後書き）

はい、後半の訓練部分、最初予定してたのよりずっと短くなりました。

多分、六割はカットした。 ついでにリースの母、エリスも参戦させる予定だったのですが色々あって無くなりました。

あ、例によって完全に勢いで書いた文章ですのでフラグが甘いや誤字脱字などあるかもしれません。
見つけましたら報告お願いします。

ここからちよつと重要

来年からもう受験生で、先生方から「お前らそろそろ本気出せ」的なことを言われたので。

これからの更新は今までの不定期っぷりとは比べ物にならないものになることが予想されます。 それこそ半年あけるとかもありえるかも知れません。

作者は一応あいだがあいても完結させるつもりですが、来年はほとんど更新できないかもしれないと今言っておきます。

長々と失礼しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5034r/>

COLOR CATS 蒼銀の吸血鬼

2011年12月27日01時41分発行